

## 「幼子から学ぶもの」



八幡福音教会 唐木 照雄

心をいれかえて幼子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう。この幼子のように自分を低くする者が、天国でいちばん偉いのである。 マタイ一八章三〜四節

私の長女が小学四年生の時に、夢を見ました。「どんな夢を見たの」と私が聞くと、娘は「子どもがいっぱいいた」と答えました。私にとりましては、忘れられない思い出の一つです。

バックストン先生は「私たちは余りにも大人びて、利口になりすぎて、自主独立的になりすぎて、幼子から学ぶ事が出来ない。それ故に幼子を教える事に失敗するのです」と述べておられます。

私たちは、幼子から何を学ぶ事ができるでしょうか。主は特に「謙遜であれ」と語っておられます。では幼子の謙遜さとは、どのようなものなのでしょう。

幼子は自意識から全く解放されています。幼子は、自分が床の間に置かれようが、台所の隅に置かれようが少しも文句を言いません。一方、大人は口には出さなくても席順を意識します。ある方

は、謙遜について次のように語っています。「きよめの美は謙遜である。それは自己満足や自己顕示ではなく、主イエスの栄光と美を見つめつつある間に、主の聖性に同化されていく事である。しかも、自らはそれを知らないでいる」とあります。あの有名なアウグスチヌスは知的にも霊的にも偉大な人物でした。しかし彼自身は、その偉大さについて全く意識していなかったと言われています。ある時、小島伊助先生に「無意識の自己忘却はあるのでしょうか」と質問しました。すると先生は「あるよ、それはね、主イエス様の臨在にどっぷりと浸りこんでいる時だよ」と答えてくださいました。アライアンスのA・B・シン普森も、イザヤ書六章の記事の中で、天使セラピムについて語っています。「セラピムは六つの翼を持っていた。その二つをもって顔を覆い、二つをもって飛びかけり、その二つをもって足を覆った。ということとは、自ら歩んできたその足跡さえも忘れるほどに、主の御思いに没入しているということである」と。

まさに、幼子とは自意識から解放された存在であり、自らの功績もこれまでの歩みも意識しないで、ただ「ぶつつかな僕です」とへりくだっている存在だ、と言っているのです。

私たちお互いも、そのように謙遜な者とさせていきたいと思います。

# 牧羊者

## 目次

巻頭言	1
目次	2
カリキュラム	3
教師養成講座	4
「子どもに届く説教」	15
旧約聖書②「人間の墮落」	21
キリストの宣教開始	45
旧約聖書③	81
「アブラハム・イサク」	93
キリストの教えと働き	98
牧羊ひろば（大久保めぐみ教会）	99
おわりに	100

### 〔凡例〕

- 1、原語について：ギリシャ語は〔ギ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
- 2、礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について  
「ホーリネス・」〔ホ・〕……………日本ホーリネス教団  
「インマヌエル・」〔イン・〕……………インマヌエル教会学校部  
「日キ・」……………日本キリスト教団出版局

# キリストの救いを知って

ヨハネ1・29

## ●旧約② 人間の堕落

7月3日  
行事 テーマ 聖書 暗唱聖句  
箱舟なるキリスト 創世記7・1～24 同上1

## ●キリストの宣教開始

7月10日  
行事 テーマ 聖書 暗唱聖句  
神の小羊キリスト ヨハネ1・29～37 同上29

7月17日  
行事 テーマ 聖書 暗唱聖句  
キリストを証しする ヨハネ1・37～42 同上41

7月24日  
行事 テーマ 聖書 暗唱聖句  
変化をもたらすキリスト ヨハネ2・1～11 同上10

7月31日  
癒しをもたらすキリスト ヨハネ5・1～9 同上8

## ●旧約③ アブラハム・イサク

8月7日  
行事 テーマ 聖書 暗唱聖句  
神による旅立ち 創世記12・1～9 同上1

14日  
行事 テーマ 聖書 暗唱聖句  
神による約束 創世記15・1～16 同上6

21日  
行事 テーマ 聖書 暗唱聖句  
滅びからの脱出 創世記19・12～28 同上17

28日  
行事 テーマ 聖書 暗唱聖句  
愛のテスト 創世記22・1～19 同上2

9月4日  
行事 テーマ 聖書 暗唱聖句  
ラビテ信仰による決断 創世記24・42～58 同上50

11日  
行事 テーマ 聖書 暗唱聖句  
信仰による柔和 創世記26・12～22 マタイ5・5

## ●キリストの教えと働き

18日  
行事 テーマ 聖書 暗唱聖句  
人を汚す罪 マルコ7・14～23 同上23

25日  
行事 テーマ 聖書 暗唱聖句  
見あげた信仰 マタイ15・21～28 同上28

# 「子どもに届く説教」

岡南教会 金井信生

—二〇〇九年度 中国教区「CS教師研修会」の講演より—

あなたが教会学校でお話をするとき、その日を伝えようとしているか、はつきりと意識しているでしょうか。聖書を手もとに開いていると思いますが、その日の金言に対して、先に何かの感動をおぼえて立っているでしょうか。「何を伝えようとしているのか」はつきりしているでしょうか。

「説教は生まれるものとは知りながら、作って話す今日の暑さよ」と、かつて神学校で説教を講じておられた長谷川計太郎先生がおっしゃったそうです。務めとして話さなければならない、ということもあり得るお互いですが、その中で、できない自分そのものをさらけ出すようなこともあります。「説教」は決して簡単な奉仕ではありません。でも、主のふところに近くある幸いな務め

です。

通り一遍の知識ではなく、自分が教えられたこと、感動したこと、心にとめたことを伝えていきたいと願いながら、題を「子どもに届く説教」としましたが、そういう説教ができたらいいな、というのが私自身の願いです。

## 1、教会学校の目的についての整理

教会学校の歴史を振り返ると、大きく二つの目的がありました。皆さんは実際に取り組んでいる中で、何のために自分たちは教会学校をしているのか、意識している



でしょうか。

## ① 広く開かれた教会学校 (日曜学校運動)

「日曜学校」の起こりは、産業革命の頃です。子どもたちは劣悪な環境で働かされ、十分に学ぶ機会も与えられていませんでした。そういう中で、子どもたちに教育の機会を与えるという目的がありました。子どもたちの能力が伸ばされ、将来の成長に向かわせるだけではありません。医療も十分でなく、不衛生な環境で、事故や病気で簡単に命を落としてしまう子どもたちに、救いの確信を与えることは大きな意味があることでした。

今、私たちの身近なところでは、教育は行き過ぎていくぐらい行き渡っているように見えます。しかし、「知育・徳育・体育」に加えて「靈育」ができるのは教会しかありません。目に見えない世界、しかし永遠に続く世界があることは、学校では教えられません。偽りの教えに惑わされやすい時代ですから、本物があることをまず教えていきたいものです。

将来への種蒔きとして、また与えられた機会を生かして主の救いを宣べ伝えること、そして幼くても救いの確信に導く働きが必要です。

## ② 信徒の子弟教育（旧約以来）

もう一つの目的は、旧約聖書の時代から行われてきた、子どもたちに神を畏れ敬うこととみ言葉に聞き従うことを教えることでした。これは神の家族の一員として子どもを受け入れ、共に養われていくことです。親は子どもに信仰を教えるだけでなく、親自身の生き方を通して、自分が神様の前に立ち、歩んでいること、またそのすばらしさを伝えていくことです。

聖書の時代には、教師を「父」と呼んでいます。時には実の親以上に親身になって打ち明けられたり、相談に乗ることもあるでしょう。もちろんそこに至るまでには祈りの積み重ねがあり、交わりの中での信頼関係の確立もあります。子どもが生まれてから親自身の成長も始まるように、教師も失敗を重ねながら成長していきます。

聖書の人物伝を見ると、完全な人はいません。むしろ

失敗だらけの姿を通して、主のあわれみと真実を知り、み言葉に支えられる生涯の確かさを証しています。子どもに福音を伝える私たちも、聖書の言葉は慰めです、励ましです、救いです、証できることが喜びです。信徒家庭の子供に劇的な回心は少ないかもしれませんが、しかし、自覚的に信仰を告白するように導くことはできます。

このような歴史の中で教会学校の働きがなされてきたことを、時に意識することも必要です。

教会学校を、それぞれの状況の中で日曜日の朝に教会（あるいは信徒の家庭を開放して、時には公園で行っておられるところもあると思います）でする意味、また、この働きは何を指しているのかを、教師たちだけでなく教会全体で共有することも大事です。その上で、対象や話し方やカリキュラムなど、準備を整えて働きをしていくなら、少々集まりが悪くても、無理解な人が内外にいても、確信をもつて取り組むことができます。

## 2、聖書は難しい

私は聖書を話すとき、新たな感動をもって伝えたいと願っています。そのために、何度も読んで聞いたりした箇所でも、「難しい」と思って改めて読むように心がけています。よくわかっているつもりで話したら反応が全くなかったり、全く別の答えを聞かされたりするものです。経験を重ね、失敗を繰り返すたびに、聖書を話すのは難しいなあと思わされます。

### ① 読むのに難しい

初めて聖書を読んで、スラスラ読めた、よくわかったということはまずないでしょう。カタカナの名前や地名は、なじみのないものばかりです。時代背景や地理、人間関係などの知識は、やはりある程度把握し、説明も必要です。何よりも、自分ではわかったつもりでも、人に、特に子

どもに話そうとすると、難しさを感じます。

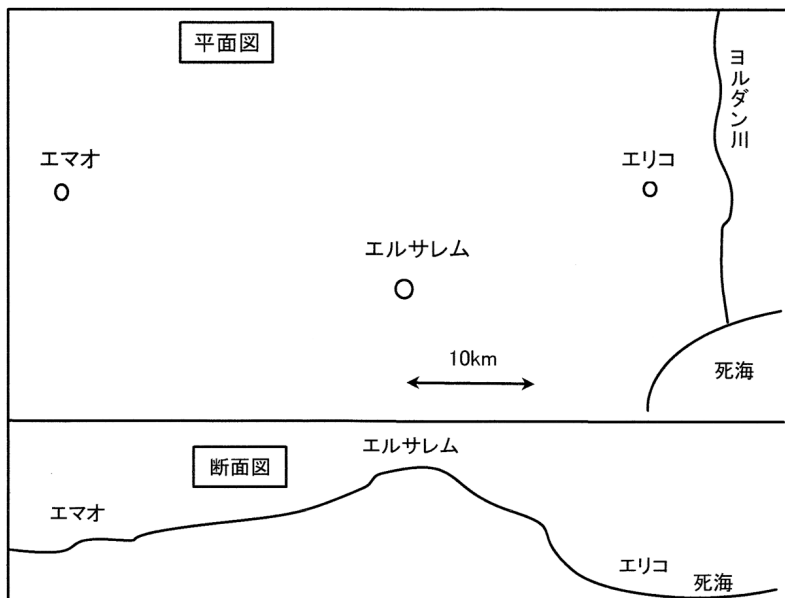
人物の関係などは、家系図や対立関係の図示などを自分で作成してみるとわかってくることがあります。

地名と共に、地形を理解すると、聖書の世界が広がります。たとえば、エルサレム周辺の地形を調べると、東西それぞれを舞台とした聖書の物語がよくわかってきます。

エルサレムからエリコへは、東に向かって20キロメートルほどの間に、標高差千メートルをくだっていきます。その険しい山道が、「よきサマリヤ人のたとえ」に出てくる強盗の待ち構えていたところでした。

反対に西に向かうと、地中海に向かって緩やかに下がっていきます。エマオに向かう弟子たちは、気落ちしていても下り坂ですから、重くても足が進みました。あるいは夕方まで西日が正面から差してきますから、多少はまぶしくて同行の人を確かめにくかったのかもしれませんが。その弟子たちがエルサレムに引き返します。今度は上り坂ですが、復活の主にお出会いた喜びと感激の大きさは、坂道もいとわせなかったのです。

また、専門的な解き明かしの中で、一方は学問的な難しさ、反対に霊的な難解さもあります。



日本語に訳すときの制限によって、本来の言葉の持つ豊かさが失われていることがあります。原語に当たったり、関連箇所にあたってみると豊かな味わいを得ますが、これをどう生かして話すかとなると、むずかしさをおぼえます。

また、霊的な解き明かしを聞くと、浅い私などが聖書の話をしているのだろうかとも思います。

聖書も取り上げ方によつては、単純な道徳のお話、あるいは泣かせる話になってしまいます。そうではなく、神の言葉を語ることが人間には難しいことです。

## ② 行うのに難しい

もう一つ難しいのは、教えている本人が、教えたとおりの生き方ができていないことがあるからです。「左の頬を向けよ」と教えていても、実際に差し出すことができるでしょうか。2マイル行けと言われて、「はい」とすぐに答えられるでしょうか。

聖書はすべての人に向けて書かれています。教えられることに従うことができるのは、神様の愛と救い主の恵み

を知ってからです。そうでないと、単なる掟おきてに終わってしまいます。

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい」(一テサロニケ5・16〜18)が、ご自分にとって重い課題ではなく、「キリスト・イエスにあつて」(18)恵みがあふれる応答となつていくでしょうか。

主イエスを見捨てて逃げ去った弟子たちも、やがて主のあわれみと力づけによつて、大胆に福音を語ることができ、海を越え山を越えて福音を伝える者に変えられていきました。

み言葉を語る者がまず恵みを知り、恵みに生かされて、はじめて、み言葉を掟としてではなく、喜びと自由を与える恵みの言葉として語ることができます。

## ③ 何のために聖書を持つのか

「聖書は難しい」と思いながら、それだけに「わかった」時の感動はまさにパウロの経験した「目から、うろこ」(使徒9・18)です。

パウロは、(旧約)聖書の知識は誰よりももっていました。しかし、聖書を持つのは学者やマニアを作るためではありません。私たちが聖書を語るのは、ただ知識を持たせるために話すのではなく、そこに出てくる人たちの姿です。時代や環境が違っても、本質的に人間の持つ、変わらない喜びや悲しみ、罪に苦しむ姿、そして主によって生まれ変わった幸いを学んでいきます。

また、聖書をマニュアルやプログラムとして与えるのでもありません。マニュアルやプログラムなら、その通りやってできれば、教材が悪かったのです。しかし、聖書は、書いてある通りにすれば、全能の神様が働いて実現し、完成に至らせてくださるのに、信じてないので、また従わないので応えていただけなのです。

聖書の教えを形通りまねることではなく、芯になっっていることを身に着けていくためのお手伝いが私たちの奉仕です。パウロのように、み言葉全部が頭に入っていたとしても、神様の御心に従いきらない自分に悩んでしまうのが、正直なところです。その悩んでいる自分自身も主はご存じの上で御手のうちにおさめてくださっているから、感謝なのです。

今、日本では誰だれもが聖書を手にし、読むことのできる時代です(世界には、そうでない地域もたくさんあります)。それなのに、自由に聖書を手にできなかった頃の渇き、求めが失われているのかもしれない。ですから、語る私たちは、難しくても味わいがある、本当に魂に成長が与えられることを伝えさせていたきたいと思います。

## 3、説教で伝えたいもの

### ① 聖書の言葉そのもの

いうまでもなく、説教で伝えたい第一のものは「神の言葉」そのものです。

パウロは「御言には、あなたがたの徳をたて、聖別されたすべての人々と共に、御国をつがせる力がある」(使徒20・32)と言い残しました。指導者がいることは幸いで

すが、自分が去つても、み言葉が固く立てられていれば大丈夫だ、と信頼していたからです。

私たちも、どんなに準備が不十分でも、自分に喜びがなくても、み言葉そのものが語られ、伝えられるときに、恵みによつてまかれたみ言葉の種が芽吹き、実を結ぶことがあります。

歴史を見るときに、神様はあえて人を隠され、み言葉そのものの力をあらわしておられます。

・古代キリスト教会最大の神学者となつたアウグスティヌスは、子どもたちの「取りて読め」という声を聞いて回心に導かれました。

・大説教家、「講壇のプリンス」と呼ばれたスボルジョンは、16歳のある日曜日、突然の吹雪のためにやむなく小さなチャペルに飛び込み、そこで信徒説教者が語る説教を聞いて、回心を経験しました。説教の内容うんぬんではなく、「地の果なるもろもろの人よ、わたしを仰ぎのぞめ、そうすれば救われる」（イザヤ45・22）と、ただ繰り返す言葉が、少年の心をとらえました。

・同志社の創立者、新島謙は、漢訳聖書を手にし、創世記

1章1節の言葉に心を動かされ、信仰に導かれました。「御言を宣べ伝えなさい」（Ⅱテモテ4・2）との言葉は真実です。蒔かれた種が芽吹く時を信じ期待し、わたしたちにできる第一のことは、み言葉をまつすぐに伝えていくことです。

## ② 聖書の言葉の現れ

次に、神様の言葉がどのように実を結んできたかを話すことができます。これには二つの主語「神は」そして「わたしは」を用いることができます。

まず、「神は」です。み言葉によつて自分に与えられた感動、あるいは決心、また変えられてきた生き方、導かれてきた人生がそれぞれにあるはずです。

・「神は『光あれ』と言われた。すると光があつた」（創世記1・3）と語るとき、自分の暗かつた心にも光がともつたことを思い起こしませんか。

・「お言葉どおりこの身に成りますように」（ルカ1・38）

と祈ったマリヤを尊敬し、倣<sup>なら</sup>いたいと願って語っているでしょうか。主イエスの御降誕は、み言葉が受肉したことだとヨハネは記します。つまり、私の生活にみ言葉が実現したということを経験していないでしょうか。

・「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」(使徒16・31)という証を教会のどなたかにしていただいてもいいでしょう。また「救い」は広く大きな意味がありますから、多くの事にあてはまるのではないのでしょうか。

次に、「わたしは」という主語があります。わたしの通ってきた経験は、その時は目が開かれていなかったが、ふりかえって見ると、み言葉に裏付けられていた、助けられていたという経験です。

・私が生徒だったころの一人の教会学校の先生を思い出します。私が困っていること、苦しんでいることを見ておられました。直接に助けたり励まされることはありませんでした。私もまだ幼くて、誰にどう言ったらいいかわからなかった頃です。後になって、祈ってくださいってしたこと、その祈りのゆえに最善の解決が与え

られていたことを知りました。

「わたしたちはどう祈ったらよいかわからないが、御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもつて、わたしたちのためにとりなして下さる」(ローマ8・26)との言葉はこういうことなんだなあと、知ることができました。

・小学校の頃、小さな嘘<sup>うそ</sup>をあやまることができず、暗くなるまで学校に残らされました。呼び出された母に導かれて、ようやく「ごめんなさい」と言い、帰って悔い改めの祈りをしました。

「わたしの子供たちが真理のうちを歩いていることを聞く以上に、大きい喜びはない」(Ⅲヨハネ4)という言葉を目にするたびに、悔い改めの小さなスタートを思い出します。

・洗礼を受けたのは、中学1年生のクリスマス。それも直前に牧師であつた父の問いかけに「はい」と答えただけです。

「なぜなら、人は心に信じて義とされ、口で告白して救われる」(ローマ10・10)。ほんの一言の信仰告白でしたが、主の御真実のゆえに救いに入らせていただきました。そんな

素直な頃があつたとは思われないほど親に対して心が離れた時期もありましたが、主が私を手放されることはありませんでした。「信仰は、私が主を握ることではなく、主が私を握ってくださっていることだ」と話させていただくのは、自分の身に起こったことだからです。

・大学生の頃、K G K（キリスト者学生会）の協力主事をしておられた先生が、しばらくの休暇の後、本国から戻ってこられました。お出会いました時に、「金井さんのために特に祈っていました」という言葉にドキッとしました。実際にちよつとふらふらしていたからです。「すべての聖徒のために祈りつづけなさい」（エペソ 6・18）を実行しておられる方がおられること、また祈りの力に守られていることを実感しました。

ヨセフ物語において、エジプトに連れてこられてポテパルに買い取られたとき、獄屋に投げ入れられた時、「主がヨセフと共におられたので」と何度も繰り返されています。ヨセフが主の臨在を実感したというよりも、人生を振り返って見て、感謝をもって証している言葉だと思えます。

もう一つ「わたしたちは」という視点を取り上げること

ができます。

教会学校では教師と生徒です。しかしどちらもキリストのからだの一部です。主にある兄弟姉妹です。今は生徒でもすぐに共に主の奉仕に携わる者になります。やがて助けてくれる存在に成長します。このような思いを失っていませんか。

教師お互いだけでなく、生徒も同労者です。荒れている学校やさびしい家庭に一人遣わされている尊い存在です。一週間の中のわずかな時間ですが、目に見えない神様が愛しておられるように、目の前のおじさんおばさん、お兄さんおねえさんも、あなたのことを愛して祈っているよと声をかけましょう。

時には傷ついている心によりそい、み言葉によっていやされることを、あるいは人を赦<sup>ゆる</sup>す祈る経験に導きましょう。共に神の国に生かされているのですから。

## 4、み言葉をヒントに



聖書のみ言葉を準備、語るとき、み言葉そのものから、奉仕の姿勢を、また説教への取り組み方を教えられます。

①「だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのようにせよ。」(マタイ7:12)

ここには、「想像力」と「創造力」が求められています。「想像力」は、しっかりと相手の様子を見ること、また見続ける中での変化をとらえた上で、相手の必要を感じ取ること、察することです。福音書を開くとき、イエス様に出会った人で、問題を抱えていない人はいませんでした。しかし、関わっていく人々はその問題に関心を持たず、ただイエス様だけが、その人の必要に目を留められ、求めを引き出されました。

また「創造力」は、その人の必要に見あったものを与えていくことです。闇には光が必要です。病には癒しが必要です。罪には赦しが必要です。今までの経験が生かされることもあります。むしろ一回一回新たなチャレンジとして受け止めることが大事です。相手は違っているでしょうし、同じ人でもまた状況は変わっているからです。

経験や知恵に基づくだけなら、それは人間的な解決です。信仰に立つての解決は、いつも「無から有を」生み出される主に土台するものです。

②「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。」  
(マタイ11:28-29)

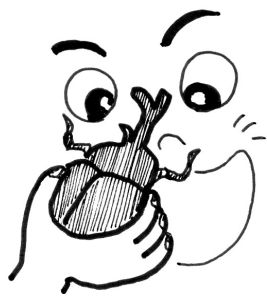
「イエス様のもとに重荷をおろすことができるんですよ」と教えている者が、自分では重荷を抱え込んだままではいけません。「すべて」とは、まだ救われていない人だけでなく、救われている人もあてはまります。

主のもとに重荷をおろし続けることのできる幸いを知るからこそ、主と共にくびきを負うことができます。くびきを負うのは、畑を耕すときや、粉を引くときなどがあるようですが、歩調を主に合わせるときに、その務めを最後まで果たすことができ、その実りを喜ぶことができます。

③「わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。」  
(ヨハネ10・10)

私たちの目指し、心がけるのも「命を得させる」ためです。良い子になった、こんなことができるようになったと、「角を矯<sup>た</sup>めて牛を殺す」ことのないように、命を得ていくかどうかに関心をおいて奉仕しましょう。「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見出すであろう」(マタイ16・25)と約束されています。相手に命を得させるときに、私たちも命を得ることができるのです。

「わたしが最も大事なことであなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであつた」(1コリント15・3)。わたしに届いた福音が、生徒にも届けられます。もつともつと私を福音で満たしてください、恵みを知らせてくださいと求め、私たち自身が豊かな福音にあずかつて、主のそば近くにある光榮ある務めに励みましょう。



## 聖書 創世記7・1～24

## テーマ 箱舟なるキリスト

## 序論

(金井信生)

ノアが神の命じられるままに造った箱舟は、世界を滅ぼす大洪水からのただ一つの救いの手段でした。これは、すべての人を滅ぼす罪から救う唯一の道であるキリストの救いを、あらかじめ表す原型といえる出来事でした。ノアは信仰によって神に応答し、滅びから救われました。

## 一、滅びからの救い

神を畏れ敬うノアは、神が告げられた「わたしは…わたしの造ったすべての生き物を、地のおもてからぬぐい去ります」との言葉を聞き、恐れをいだき、信じました。大きな地震と津波の被害を受けた今年、大洪水について聞き、語るのにはためらいを覚えるかもしれません。しかし、まことの神に背き、キリストを受け入れないなら、どんな立派な人でも「自分の罪過と罪とによって死んでいた者」(エペソ2・1)なのであり、「あなたがたも悔い改めなければ、みな同じように滅びる」(ルカ13・

3、5)のです。

「一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることとが、人間に定まっている」(ヘブル9・27)とあるように、厳粛な事実を覚えなければなりません。しかし、神の宣告の目的は、私たちを怖がらせるためではなく、救いに招くためです。おどすのではなく、キリストの十字架と復活を信じ、この滅びから先に救われた平安と喜びをもって、真理を大胆に語らせていただきます。

## 二、神の備えられた救いの道

ノアは神が命じられるままに箱舟を造りました。また「箱舟にはいりなさい」と命じられて、従いました。世界を滅ぼすほどの大洪水に、人間の知恵や力は通用せず、神の備えられる手段を選び、定められた時に従うことが最善だからです。

ノアとその家族が箱舟に入ると、動物たちが「ノアのもとにきて」箱舟に入りました。先に神が箱舟を造るよう命じられた言葉には「すべての生き物、すべての肉なるものの中から、それぞれ二つずつを箱舟に入れて」(6・19)とありました。どうやって集めるのか、どの一つが

いを選ばいいのかわかりませんでした。でも、言われたように箱舟を造りノアたちが中に入ると、神の御手が働いてちゃんと動物たちが連れてこられました。

十字架による救いも、「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」（使16・31）と約束されています。いっどうやって救われるのかは主に委ねて、まず福音に触れた「私」が信じ救われていくことです。あとは神がそれぞれに救いの道を備えておられます。

### 三、信仰による応答

「ノアはその時代の人々の中で正しく、かつ全き人」（6・9）でした。しかし、神はそれだけでノアを滅びから救うことをなさらず、箱舟を造ることを命じられました。ノアも神の言葉に従うことを通して、「神と共に歩む」姿を家族にもまわりの人にも示しました。

箱舟に入るときもそうです。まだ洪水どころか雨の兆候もない中で、主が命じられるまま箱舟に入っています。神を信じる、キリストを信じるとは、人を恐れないで、ただ神を畏れ、その言葉である聖書を信じることであり、

またみ言葉に従って生きることです。

ノアとその家族、そして動物たちが箱舟に入ると、〈主は彼のうしろの戸を閉ざされた〉。箱舟は防水のためにアスファルトが全面に塗られています。ただ一か所、人の手で塗ることができない戸は、主の手によつて閉ざされました。私たちも主から知恵と力が与えられていますから、これを用いて日々の生活を守り、将来に備えています。しかし、最後は主に委ね、従っていかなければ、全き平安は訪れません。永遠に至る確信は、ただ主だけが与えてくださるものです。

イエス・キリストは、私たちに代わつて十字架の上で罪のさばきを受けてくださいました。主イエスを信じるのは、滅びから救い出されて、これからは神の愛の御手に守られて歩み、やがて天の御国に迎え入れられる箱舟に入ることです。感謝してキリストの救いを受けましょう。

### 結論

私たちを永遠の滅びから救い、罪をきよめてくださるキリストを信じ、救われた喜びの生涯に進みましょう。

## 研究資料

(小平徳行)

箱舟が完成し、主は予告通り大洪水によってさばきをなされた。箱舟によるノア一家の救いは、イエス・キリストによる救いをあらかじめ示したものである。キリストが再臨について語られたとき、ノアの時代を例にあげて厳粛に警告を与えられた(マタイ24・37〜39、ルカ17・26〜27)。

## テキスト

**1 あなたと家族とは** ノアの家族も箱舟に入ることが許されたのは、「あなたが正しい人であると認めたからである」とあるように、ノアのゆえであつた。正しい人先週の研究資料を参照。

**2 清い獣** 清い獣と、清くない獣の区別は具体的に明示されていない。清い獣は種の保存とともに、いけにえのためでもあつた(8・20)。

**七つずつ** 二つずつ 新改訳、新共同訳では「七つがい」「一つがい」。本文では「七」「二」と数字のみであり、「七つがい」とも「七匹」とも解釈できる。6・19とは矛盾するものではなく、より詳しい説明。

**3 空の鳥** ここでは清いもの、清くないものの区別は

されていないが、8・20に「清い鳥」とあることから両者が区別されていたことがわかる。ここでは、詳しい説明を省略したと考えられる。

**4 七日の後** 神の定めの際の厳粛な宣言であると共に、七日間の猶予でもあつた。ここにノアの家族以外にも救われる可能性を与えた神のあわれみ、寛容がある(1ペテロ3・20)。**四十日四十夜** 文字通りの期間と考えてよい。

**5 16** ここではノアが命じられたようにしたこと、ノアとその家族、動物たちが箱舟に入ることが繰り返されている。これにより、この場面の重大さと厳粛さを印象付けている。

**5 ノアはすべて主が命じられたようにした** 箱舟を造る時から、家族とすべての生き物を箱舟に入れるまで、洪水が起る何の兆候も見られなかったであろうが、ノアは主に従い、すべてを信仰によって(感覚によってではなく)行つた(ヘブル11・7)。

**9 ノアのもとにきて** 動物がノアに連れてこられたのではなく、自発的にノアのもとにきた。かつてアダムのもとにすべての生き物が連れてこられた時と同様に(2・19)、神の御手がそこに働いていた。

11 ノアの六百歳の二月十七日 6節の繰り返しでなく、

洪水の始まりを正確に記そうとしている。このように日付を記すことにより、この洪水が事実であることを強調している。太いなる淵の源 巨大な地下水源と考えられる。この大洪水は豪雨だけでなく、何らかの地の変動により地下より水が噴出したことにもよることを示している。天の窓が開けて 先の「太いなる淵の源」とあわせて、「おぞらの下の水とおおぞらの上の水」(1・7)を連想させる。

13 その同じ日に…箱舟にはいった 神はご自身の民の安全が確保されるまではさばきをなさらない(19・22参照)。

16 主は彼のうしろの戸を開ざされた ノアの背後から戸が閉められた。箱舟の戸を開ざしたのは主であることを強調している。これはノア家族の救いのための主の保護の御手であると共に、それ以外の者たちに対しては恵みの門戸が閉ざされ、救いの可能性がなくなったことを示す厳粛な瞬間である(マタイ25・10、ルカ13・25、Ⅱコリント6・2参照)。

20 山々は全くおおわれた 神は人間が逃れる場所を残さなかった。神が備えられた救いを拒むならば、他に救

いの道はない。

23 ぬぐい去られ(ハ)マーハー)地上の生き物はただ死んだのではなく、ぬぐい去られた。これは、「あるものを他のものから取り去る」という意味から、きよめるという意味にもなる。つまり罪を取り除いて地をきよめることを強調している。6・7、7・4の成就。Ⅰペテロ3・21では洪水の水は「バプテスマを象徴するもの」としている。つまり、洪水によって罪深い世界は葬られ、箱舟はその中に浮かび上がり、ノア一家は救われた。これは古き人がキリストと共に死に、キリストと共に新しいいのちに生きる者としてよみがえることを象徴している。

ノアに対して箱舟に入るようにと言われたのは、罪人に対する神の招きの型である。キリストという箱舟はすでに用意されている。洪水の激しさは神のさばきの激しさを示している。しかしそれにも耐えられる箱舟はキリストによる救いの確かさを思わせる。

参考図書 舟喜信「創世記」『新聖書注解・旧約Ⅰ』(いのちのことば社)、パゼット・ウィルクス『創世記講演』、A.B.Simpson, "The Christ in the Bible Commentary Vol.1", 他

## 聖書

創世記7・1～24

## タイトル

箱舟に乗り込もう！

## 暗唱聖句

あなたと家族とはみな箱舟にはいりなさい。  
創世記7・1

## 目 標

箱舟なるキリストを信じ、その救いの中に入る者となる。

## 導入

(飯田勝彦)

「♪パンポンパンポン♪」ご注意ください。間もなく3番線の列車が発車いたします」、「プシュー、ボタン!」、「あーっ、待って〜!」。皆さんは、列車の時間に間に合うと思つてのんきにしていたら、列車のドアが閉まつてしまい乗り遅れた、という経験ありませんか? 電車なら次を待てば良いかもしれませんが。でも、もしそれが一本しかない天国行きの列車ならどうでしょうか。今日は、これと似たノアの箱舟のお話です。

## 箱舟を備えた神様

今から数千年も前にノアという人がいました。彼は、神様を心から信じ、神様が言われることを守っていました。また、ノアは神様を愛していたのでいつも神様と共に

に生活していたのです。そのようなノアを神様も愛されていました。神様から愛され、また神様を愛する関係って素晴らしいですね。皆さんの毎日はどうでしょうか。

ノアが生活していた時の人たちが皆、神様を愛し、神様と共に歩んでいたかというところではありませんでした。多くの人たちが神様を無視し、自分勝手に生活していたのです。その結果、人々は「あいつの物を盗んでやろう」とか「あいつをいじめてやろう」と、いつも悪い思いで生活していました。だから、罪を犯す人たちがたくさんいたのです。これを神様が見られた時、非常に心を痛められました。神様は、皆さんの心をいつも見ておられるお方です。皆さんの心や生活には、神様が悲しまれることはないですか?

神様は、人の心の様子を見て、人を造られたことを後悔されました。そして、人をすべて洪水によって地上からなくしてしまおうとされたのです。

しかし、正しい人をも地上から取り去ろうとはされませんでした。神様に忠実であったノアとその家族は救おうとされたのです。そのため、神様は、ノアやその家族が助かるために、箱舟を造るよう命じ、箱舟を準備さ

7月

## 3日 礼拝メッセージ例

れたのです。

ノアは神様に言われる通りに箱舟を造り始めました。その箱舟は、先週も見ましたが、高さ約13.5メートル、長さ約135メートル、幅約22.5メートルほどの大きな舟でした。

## 箱舟であるキリスト

洪水はいつ起こるか分かりません。しかし、ノアは神様の言われる通りに箱舟を造り始めました。恐らく、神様によつて滅ぼされようとする人たちは、大きな舟を造っているノアを、おかしなやつだとバカにしたでしょう。でも、ノアはひたすら箱舟を造つたのです。それが完成したとき、ノアは急いで家族や動物たちを箱舟に入れました。その瞬間、神様が箱舟の戸を閉められました。そして雨が降り始め、それが四十日間も続きました。川や池の水は見る見る水かさを増し、ついにはあふれ、洪水が起つたのです。ちよつと想像してみてください。箱舟に乗れなかった人はどうなつたでしょうか。みんな水に流され、死んでしまつたのです。

このことは、昔の話だけではありません。神様はやがて罪を犯している人、逆らう人を裁かれるのです。皆さんは、どうですか。私たちは、自分の力では助かることができま

せん。ですから、神様は私たちに助け舟を備えてくださいました。それが、救い主イエス・キリストなのです。箱舟に乗らなかつた人たちが、滅ぼされたように、神様が備えてくださったイエス様を信じない人は、永遠に滅びてしまうのです。

しかし、自分の罪を悔い改めてイエス様を救い主と信じるなら、その人は箱舟に入った者であり神様の裁きから救い出されます。皆さんは、箱舟であるイエス様の中に入っていますか。それともまだですか。「神様の裁きなんてないよ」、「まだ信じなくても大丈夫だ」と思っている人はいませんか。箱舟が造られたのは、洪水が起こるからでした。イエス様が来られたということとは、神様の裁きの時が近づいているということです。

## まとめ

神様は、皆さんを助けたいと願つて、イエス様を与えてくださいました。箱舟であるイエス様を今日、信じて救われましょう。すでに信じている人は、家族の方も一緒に救われるようイエス様を伝えましょう。  
♪まことのかみさま♪

(ホーリネス子どもさんびか 121)





## 聖書 ヨハネ1・29～37

## テーマ 神の小羊キリスト

## 序論

(高橋頼男)

イエス・キリストの先駆者としてのバプテスマのヨハネは、神に示されて自分が見たこと聞いたことを証し、イエスがキリスト・メシアであることを人々に紹介しました。彼の証について、さらにその核心の言葉（見よ、世の罪を取り除く神の小羊）について学びます。

## 一、バプテスマのヨハネの証（29～34）

バプテスマのヨハネはこの時すでにイエスにお会いしており、イエスご自身の求めに従って彼にバプテスマを授けていました。そして、このイエスについて示されていたこと、見聞きしていたことを証しました。

①この方は（わたしよりもすぐれたかたである。わたしよりも先におられたからである）とは、イエス様の先在を暗示するもので、イエス様は永遠から永遠におられる神であることを証しています。

②へわたしは、御霊がはどのように天から下って、彼の上にとどまるのを見た。…わたしをおつかわしになったそのかたが、わたしに言われた…「聖霊がはどのような姿を

とつてイエスの上に下り、そして天から声がした、『あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である』（ルカ3・22）。御父とその子であるイエス様が一体であられることを明らかにし、父と御子の関連を証しました。

③（その人こそは、御霊によってバプテスマを授けるかたである）。ヨハネは神から語られていたイエスについての証を見て、この方こそ御霊によってバプテスマを授けるお方であることを証しました。

④そして、何よりも、このお方は「世の罪を取り除く神の小羊」であると証しています。

## 二、世の罪を取り除く神の小羊（29）

罪ある人間が聖なる神に近づくには、どうしてもいけにえが必要です（レビ1～7章）。とりわけ罪のためのいけにえが、ささげられなければなりません。神が備えられた世の罪を取り除くいけにえは、「神の小羊」でした。昔、神殿において、罪の贖いのために小羊が連れてこられ、人々はその小羊に手を置いて罪の告白をしました。そうすると、人の犯した罪が小羊の上に転嫁され、祭司は小羊を殺しその血を祭壇に注ぎました。このようにして、罪のない小羊による身代わりの死を通して、人間の罪の赦しの祭儀が行われたのです（レビ4・32～35）。しかし、そのよう

7月

## 10日 聖書講解

な儀式によつてでは人間の心はきよめられることができず、良心の呵責<sup>かじやく</sup>が去ることはなかったのです。この旧約時代の祭儀は、やがて来られるイエス・キリストによる贖いのひな型でした（ヘブル9・11～14）。

「神の小羊」のモチーフはすでに旧約の中に出てきます。出エジプトにおいて、過ぎ越しの祭りがおこなわれ、小羊が殺されてその血が家のかもしに塗られました。その夜、さばきのみ使いは、その血を見て過ぎ越したのです（出エジプト12章）。イザヤ五三章には、苦難のしもべが「ほふり場にひかれて行く小羊」（7）として描かれています。これらはキリストのことです。ヨハネは、この十字架のイエスこそ、神の小羊キリストであると言っているのです。イエス・キリストこそ人間の罪を贖いきよめるお方でした。このお方は、人間の罪を贖うために人となられ、罪を犯さない生涯を全うされ、十字架という祭壇の上に神の小羊としてご自身をささげられました。このキリストの血による贖いによつて、初めて人間は罪の完全な贖いを受けることができたのです。バプテスマのヨハネはまさに、この方こそ永遠の神の小羊、人間の罪を贖うお方であることを指し示しました。

## 三、見よ（29）

かつて、モーセは荒野において神に命じられ、青銅の蛇を造りました。その蛇は宿営の中で旗竿の上につけられて高く掲げられました。そして、罪を犯し毒蛇にかまれた者が、どこにいても直ちに竿に掲げられた蛇を仰いで見るなら、瞬時に毒が除かれ生きることができました（民数記21・4～9）。罪を犯した者はいつでもどこからでも「青銅のへびを仰いで見て生きた」（9）のです。

バプテスマのヨハネは「見よ！」と叫びました。私たちのために、すでに成し遂げられた神の贖いの御業を信じ受け取るという『信仰』を促しています。信仰によつて罪の赦しは私たちのものとなるのです。どんな時にも、どんな状況の中にあつても、ただひたすら、繰り返し繰り返し十字架の主を仰ぐ者でありたいと思います。

イエス様は、私たちの罪のために十字架にかかり、身代わりの贖いを成し遂げてくださいました。その十字架が、私の罪のためであると信じて十字架の主イエスを仰ぐ時、私たちの罪は直ちに赦され、きよめられ、生きるものとされるのです。

## 結論

今、神の小羊であるイエス・キリストを仰いで、信じて、罪の赦しを得ましょう。

## 研究資料

(中島啓二)

## テキスト

29 その翌日 ユダヤ人たちが洗礼者ヨハネのもとに使いを遣わした日(19、28)の翌日。そのやりとりの中でヨハネは、自分はキリストではないこと、そしてキリストは自分のあとに來られることを明言している。イエスが自分の方にこられるのを見て ヨハネ福音書はイエスがバ

プテスマを受ける実際の場面を描いておらず、ここにイエスは、すでにヨハネからバプテスマを受けた者として登場する。ヨハネは、群衆に対してイエスを、その使命を端的に表す表現によって紹介するのである。世の罪を取り除く神の小羊 黙示録5・6以下には「ほふられ、その血によって、神のために、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から人々をあがな」った「小羊」が登場する。このようにキリストを指し示す表現として小羊を用いるのは、新約ではヨハネ福音書と黙示録の、二つのヨハネ文書だけである。旧約に目を移すと、洗礼者ヨハネがたぶん念頭に置いていたであろう箇所がいくつかある。一つは「神みずから燔祭はんさいの小羊を備えてくださる」(創世記22・8)

という、アブラハムがイサクをささげる場面。二つ目は出エジプトにおける過ぎ越しの小羊(出エジプト12章)である。これら二つにおける小羊は、厳密に言うところの犠牲ではないのだが、前者ではイサクに代わる犠牲として(ただし実際は雄羊)、後者では罪の力からの解放を象徴するものとして捉えることができるだろう。三つ目の箇所は、イザヤ53章である。ここでは、キリストを指し示す苦難のしもべが、「ほふり場にひかれて行く小羊」(7)として「自分を、とがの供え物となす」(10)とあり、罪のための犠牲というポイントがはっきりと示されている。このように「神の小羊」のモチーフは、苦難のしもべのイメージを中心としつつ、複合的な背景を持つものと考えて良いだろう。そのイザヤ53章では、「毛を切る者の前に黙っている羊」(7)とあるように、苦難のしもべの従順さが強調されている。イエスは、まさに従順なしもべとして、ヨハネからバプテスマをお受けになった(マタイ3・15)。罪なきお方であるから、もちろん自分の罪のためではない。贖罪しゅくざいの死という使命を、強いられではなく自発的に受け入れたことのアかしとして、イエスはバプテスマをお受けになったのである。

**30 わたしよりも先におられたからである** 27節でもヨハネはイエスの圧倒的優位を告白しているが、ここで一つの理由を示している。「あとにおいでになる方」(27)であるのに、「先におられた」と言うことは、「初めに言があった」(1)というイエスの先在性を暗示するものであり、それが「神の子」(34)告白につながっていくのである。

**31 わたしはこのかたを知らなかった** 神からの約束のしるし(33)を見るまでは、ヨハネも誰がキリストであるか知らなかった。このかたがイスラエルに現れてくださるそのことのために… 彼が神から与えられた使命は、まさにイエスの公生涯のためのカーテンを開くことであつた。

**32 御霊がはどのように天から下って、彼の上にとどまるのを見た** イザヤにおけるメシヤ預言「その上に主の霊がとどまる」(11・2)、「わたしはわが霊を彼に与えた」(42・1)の成就であると共に、ヨハネが与えられていたしるし(33)の実現であった。彼はそれを見て初めて、イエスこそキリストであるとの確信に至ったのである(34)。

**33 御霊によってバプテスマを授けるかた** エゼキエルは、神が民を「清い水」(36・25)できよめるだけでなく、「新

しい霊」(同26)をお授けになると語る。前者がヨハネの水のバプテスマであるとするなら、まさにイエスこそが「新しい霊」によって救いを完成されるお方なのである。

**34 神の子** バプテスマを受けたイエスに、「わたしの愛する子」(マルコ1:11)との天の声があったと三つの共観福音書は記している。ヨハネ福音書ではその場面の代わりに、洗礼者ヨハネが、30節での先在性の証言と合わせて、イエスと御父との永遠の関係を証言していると言えよう。

**35 ふたりの弟子たち** 次週分(37)を参照のこと。

**36 見よ、神の小羊** 前日の証言(29)の要約だが、驚くことは、弟子たちに語ったこの言葉の中に「私にはなく」イエスに従え」との意図が、おそらく含まれていたであろうことである。弟子を他の教師に譲ることは当時の社会では考えられないことである。イエスの前でのヨハネの徹底した謙遜が表されていると言えよう(3・30参照)。

参考図書 注解書 G.R.Beasley-Murray(Word), F.F.Bruce (Eerdmans), B. Lindars (New Century Bible). その他 The IVP Bible Background Commentary: NT.

## 聖書

ヨハネ1・29〜37

## タイトル

心をきれいにしてくださるイエス様

## 暗唱聖句

見よ、世の罪を取り除く神の小羊。

ヨハネ1・29

## 目標

神の小羊キリストを信じ、罪の赦しを頂く。

## 導入

(飯田勝彦)

もし、皆さんの大切になっている物に黒いペンキが付いたらどうしますか。もちろん一生懸命、きれいにするでしょう。水でふいたり、洗剤をつけてさらにふくでしょう。それでもダメならどうしますか。もしかしたら、お父さんやお母さんに手伝ってもらう人もいるかもしれませんね。服や靴などが汚れたら、洗濯をしてきれいにすることが出来ます。でも、心はどうでしょうか。

## 私たちには罪がある

よく「あの人、性格悪いよね」とか、反対に「あの人、本当に良い性格してるよ」と言ったりしませんか。皆さんが、性格が悪いと思う人はどんな人でしょうか。親切ではなく、いつも人の悪口を言っている人、自分のこと

しか考えない人、だれかをいじめる人などが性格の悪い方に入るでしょう。皆さんは、「自分はよい性格で心は汚れていない」と言えますか。

皆さんの中で、今まで一度も嘘をついたことがない人、家族とけんかをしたことがない人、「あの人さえいなければ良いのに」と思ったことのない人がいるでしょうか。そのような思いを「罪」と言います。罪は、大切な心を汚してしまいます。

聖書は、「私たち人間には皆、罪に汚されている罪人だ」とはっきりと言っています。これに当てはまらない人はいないのです。ですから、ここにいる全員、罪によって心が汚れているのです。「そんなことはない！」という人がいるでしょうか。

聖書が私たちを罪人と言っているのは、本当に私たちが罪人だからです。皆さんにとって心はとても大切なところでしょう。そこが罪によって汚れていて平気でないでしょうか。汚れていることが分かれば、きれいにしたいでしょう。でも、罪を認めないで自分の心は大丈夫だという人は、心がきれいになるどころか、罪の汚れが心の中に広がっていくのです。私たちは罪に汚れた心を自分

では、どうすることもできないのです。

### 神の小羊であるキリスト

私たち人間の罪が赦されるためには、血が必要でした。血には命があります。ですから、人間の罪が赦されるために、誰かが血を流し、その命を落とす必要があったのです。神様はイエス様が来られる前に、罪の汚れを取り除く方法をイスラエルの民に与えられました。それは、傷のない動物をいけにえとして神様にささげることでした。罪を犯した人は動物の頭に手を置き、すべての罪をそれに負わせます。そして、祭司がその動物を殺した時、罪は赦されたのです。でも、本当は動物のいけにえでは、完全に罪を取り除くことはできなかったのです。ですから、神様はイスラエルの民にこのいけにえを通して、完全な救いをもたらす救い主を待ち望むようにされたのです。それが、救い主であるイエス様です。

動物は、私たち人間よりも劣るものです。ですから、私たち人間の罪が赦されるためには、罪がないきよい人間の血が神様にささげられる必要があるのです。でも、私たちは皆、罪があり、汚れた者です。ですから、一度も罪を犯したことのない、きよいイエス様が私たちのかわりになっ

て罪をすべて負い、いけにえとなりました。

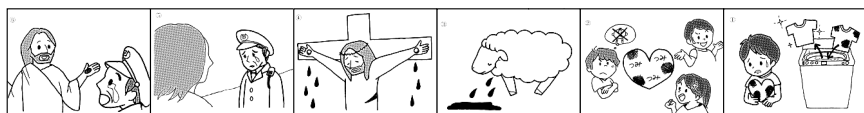
ある所に、自分の罪に悩んでいる警察官がいました。彼は聖書の話を聞き、自分は罪があり、永遠の滅びに行くばかりだと落ち込んでいました。ある時、夢を見ました。永遠の滅びの道を歩いていると、前から歩いて来る人がいます。「どこに行くのか」、「はい、永遠の滅びに向かっています」、「あなたはそこに行かなくてもよい」、「えっ、どうしてですか」、「わたしが代わりに行ったから」。

それはイエス様でした。イエス様は、私たちのどうすることもできない罪をすべて背負って、十字架で命を投げ出されたのです。このイエス様の十字架を信じるなら、イエス様が私たちの心にこびりついている罪を、すべてきれいに取り除いてくださいます。

### まとめ

イエス様こそ私たちの罪を取り除くために、いけにえの小羊となってくださったのです。

イエス様を信じましょう。そして、心を汚すすべての罪を、イエス様によつてきれいにして頂きましょう。  
♪じゅうじか♪（ホーリネス子どもさんびか 62）



# 聖書 ヨハネ1・37〜42 テーマ キリストを証する

## 序論

(高橋頼男)

バプテスマのヨハネの証を聞いてイエスについていったアンデレともう一人の弟子（おそらくヨハネ）は、〈きてごらんなさい〉という招きに従い、その日イエスのところに泊まりました。それは素晴らしい出会いの時でした。彼らはイエスと交わり、このお方こそメシアであることを知りました。

その一人アンデレは、今度は自分の兄弟ペテロにイエスがキリストであることを伝え、キリストのもとに導きます。イエスはペテロに目を留めて、彼を新しい名で呼ばれました。

## 一、キリストに出会う（37〜38）

「人生は出会いで決まる」と言われます。高潔で理想を持った人、ユニークな人物、愛すべき人との出会いは、私たちに大きな影響を与えます。しかし、人生の決定的出会いは、私たちの『救い主』との出会いです。バプテスマのヨハネの証の言葉を聞いたアンデレとヨハネは、イエスについていきました。彼らは出会いのチャンスを生かし、ただちに主に

ついていき、主に問いかけ、そして主から招きを受けました。出会いにおいて大切なのは与えられた機会を捉えることです。主との出会いの機会をとらえ、主を切に求めることです。また、積極的に主と交わる時を持ちましょう。私たちが意思するなら、主の側では、いつも待っていてくださるのです。

「それゆえ、主は待っていて、あなたがたに恵みを施される。それゆえ、主は立ちあがって、あなたがたをあわれまれる。すべて主を待ち望む者はさいわいである」（イザヤ30・18）。

## 二、キリストのところに泊まる（39）

彼らが〈どこにおとまりなのですか〉とイエスに問うと、〈きてごらんなさい〉と、親しく招かれました。彼らはその日イエスのところに泊まりました。一晚の宿りの中で彼らが持った主イエスとの深い交わりは、彼らの霊の目を開き、イエスがキリストであることがわかったのです。それは実に幸いなイエスと共なる宿りでした。

〈きてごらんなさい〉とイエスに招かれて共に宿り、「きょう、あなたの家に泊まることにしている」（ルカ19・5）と言われて、喜んでわが家にお招きし、「一緒に泊まり下さい」と強いて願ってお泊めする（ルカ24・29）のです。

場合や状況は色々ですが、イエスと共に宿り、交わる幸いには変わりありません。私たちは、イエス・キリストを昔存在した一人物とするのではなく、十字架にかかり、復活して、今現実に生きておられる人格的存在として、心の中に信じ、受け入れ、交わることが許されているのです。

「わたしは一つの事を主に願った、わたしはそれを求める。わたしの生きるかぎり、主の家に住んで、主のうるわしきを見、その宮で尋ねきわめることを」(詩篇27・4)。私たちの祈り、静まりの時間が豊かになりますように、イエスと共に「時」と「場所」と「心」を備えましょう。

### 三、キリストを証し、キリストのもとに連れていく

(41〜42)

アンデレは、まず兄弟ペテロをイエスのもとに連れていきました。主は、このペテロに目を留めて、彼に尊い名をつけて召されました。この後、ペテロは教会における大きな働きを担う器となりました。それはアンデレの思いをはるかに超えていたことでしょう。さらに、アンデレは、パン5つと魚2匹を持つ少年をキリストのもとに導き(ヨハネ6・8〜9)、主イエスに会うことを切望する異邦人であるギリシヤ人(ヨハネ12・21〜22)をピリポ

と一緒にキリストのもとに導いています。アンデレは、他者をキリストに導くことを喜びとし、そのことを切に願った人であつたと思われます。しかし誰でも、大きな喜びに満ちた出会いを経験するのなら、じっとしているわけにはいきません。真の出会いをするなら、この出会いの喜びと幸いを他の誰かにも伝えたいとの切なる願いがおこります。

「アンデレ活動」は、あらゆる伝道の基本であり、だれにでもできる伝道です。祈りの中でキリストに導くべき隣人を示され、ノートやカードに名を書いて祈りはじめます。その人を愛し、真の友となるために聖霊による神の愛(ローマ5・5)を祈り求めます。さらに、その人に近づくための知恵や方法を祈り求め、それを実践していくのです。愛と信頼関係を通して、福音は伝わります。子ども、中高生、大人、だれでも、どんな伝道でも基本はこれです。そのために、自分自身が日々キリストに近づき、キリストとの生きた交わりがあることが秘訣です。

### 結論

私たちも、キリストとの確かな豊かな出会いを経験し、キリストを喜びと確信をもって証し、人々をキリストのもとに導くものとならせていただきましょう。



## 研究資料

(中島啓二)

## テキスト

37 そのふたりの弟子 一人はアンデレ(40)だが、もう一人の名は記されていない。この福音書を記したいいわゆる愛弟子(13・23他、おそらくヨハネ)と見る説が主流だが、この福音書で何度かアンデレと一緒に登場するピリポという説もある(6・5・8、12・21・22)。ヨハネがそう言うのを聞いて 先週分(36)を参照のこと。

イエスについて行った <sup>(キ)</sup>アコルセオは、共観福音書における弟子たちの召命の場面すべてで用いられている動詞(マタイ4・20他)。ここでも、単に「ついて行った」だけでなく、「(弟子となる前提で) 従った」という意味が含まれている。ヨハネから、やがて来られる救い主について何度も聞かされてきた彼らは、今、その救い主を目の前にした。ヨハネの言葉(おそらく「彼に従え」と言う意図が含まれている)に促されたからという理由だけでなく、自分たちの思いからも、イエスに従って行ったのであろう。

38 何か願いがあるのか この福音書でのイエスの第一声。

イエスの前に来る者は誰でも、自分がイエスに求めているものは何かを明らかにしなければならぬ。彼らの願いはイエスをもつと知りたいということであった。どこにおとまりのですか 滞在場所を訪れて、夜通しイエスの話を聞きたいとの願いが婉曲的に込められた質問だろう。

39 きてごらん下さい。そうしたらわかるだろう 二人の質問の意をくみ、深い交わりへと招く答えであった。時は午後四時ごろであった 原語では「(夜明けから) 10番目の時」。距離によつては、日没までに歩いて家に到達できない時間であり、旅人をもてなすことが美德とされる文化においては、そのような道連れを家に招くことが期待された。イエスがその夜、二人に何を語ったかは記されていないが、その会話を通して、洗礼者ヨハネの証言は正しかったと確信するに至ったことは間違いない。

40 シモン・ペテロの兄弟アンデレ 初代教会においてペテロは最も有名な人物の一人であった。アンデレを彼の兄弟として紹介した上で、彼がイエスと会い、本名のシモンからペテロと呼ばれるようになったいきさつが示される。

## 41 彼はまず自分の兄弟シモンに出会って言った 洗礼者

ヨハネの場合と同様、アンデレはイエスと出会った喜びを自分の内だけにとどめておくことが出来なかった。最高のあかしは、イエスを人々に紹介することである。メシヤ(訳せば、キリスト) 新約で〔ヘ〕、〔ア〕メシヤが用いられているのは、ことと4・25の二箇所だけである(メシヤと〔キ〕リスト、いずれも「油注がれた者、救い主」の意)。旧約でのメシヤの用例は、①イスラエルの王(「この人こそ、主が油を注がれる人だ」サムエル上16・6)、②祭司(「油注がれた祭司が…」レビ4・3)、③預言者「わが油そそがれた者たちにさわってはならない、わが預言者たちに害を加えてはならない」詩105・15)の三つ。これらのうち、当時のメシヤ待望は、圧倒的にイスラエルを抑圧から解放する王としてのメシヤ像で占められていた。そんな中で、イエスは、王、祭司、預言者の三つの職をあわせ持つ、至高のメシヤとして来られたのである。このときのアンデレの理解は、おそらくまだ不十分な、世間の期待するメシヤ像と遠くないものであったであろう。けれどもそれは、後にイエスをより深く知るにつれて、イエスの宣教の性格に沿ったものへと変わっていったのである。

である。

## 42 そしてシモンをイエスのもとにつれてきた この時ア

ンデレは、後年、ペテロが教会において大いなる働きを担うことになるなどとは、夢にも思わなかったであろう。しかし、イエスは彼に目をとめて言われた イエスはペテロに備えられている使命をご存じであった。そしてその短い会話の中で、そのことを暗示されたのである。ヨハネの子シモン マタイ16・17「バルヨナ・シモン」(ヨナの子シモンの意)は短縮形。どちらも同名の他者と区別するための一般的な呼び方であった。聖書の中だけでも多くのシモンが登場する。ケパ(訳せば、ペテロ)と呼ぶことにする〔ア〕ケパ、〔キ〕ペテロは、いずれも「岩」の意。教師が自分の弟子に特徴的なニックネームを与えることは、一般的なことであった。また、旧約聖書では、神が、人の新しい特徴を示すために、その人の名を変えることもよく見られる(アブラハム、サラ、ヤコブなど)。後の、「あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう」(マタイ16・18)との言明の中に、ケパ(ペテロ、岩)との命名理由が示されるのである。

参考図書 7月10日分と同じ。

## 聖書

## タイトル

## 暗唱聖句

## 目標

ヨハネ1・37〜42  
すばらしいイエス様を伝えよう！

わたしたちはメシヤ（訳せば、キリスト）にいま出会った。ヨハネ1・41

キリストに出会い、キリストを証する者となる。

## 導入

（飯田勝彦）

皆さんは、お菓子の当たりくじが当たったこと、あります。当たった時「やったくー！ラッキー」と声を上げて喜んででしょう。うれしいことや、お腹が痛くなるほどおもしろいことがあったら、皆さんは、それを誰にも言わないでいられますか？お父さんやお母さん、兄弟や友だちに伝えるでしょう。

それと同じように、今日、登場するアンデレも、素晴らしい喜びを伝えた人でした。

## イエス様に出会ったアンデレ

アンデレは、バプテスマのヨハネの弟子の一人でした。

ヨハネはイエス様が来られることを、前もって多くの人

に知らせる大切な役目をしていました。ヨハネは、以前から「わたしのあとから来るかたは、わたしよりもすぐれたかたである」とイエス様のことを話していました。ですから、それを聞いていたアンデレたちは「イエス様ってどんなに素晴らしい方なんだろう」と期待して待っていたに違いありません。そのイエス様が来た時、ヨハネは「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。『わたしのあとに来るかたは、わたしよりもすぐれたかたである。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この人のことである」とイエス様を紹介したのです。すると、ヨハネの弟子であったアンデレたちは、イエス様のことがもつと知りたいと願い、イエス様の後をついて行ったのです。イエス様は、彼らをご自分の泊まっている場所に連れて来られ、彼らを泊められました。

もし、野球のイチロー選手や、サッカーの長友選手が家に泊めてくれたらどうでしょう。もう、それはうれしくて寝られないほどでしょう。恐らく、アンデレたちは、イエス様にたくさん質問し、イエス様のことを知ることができたに違いありません。彼らがイエス様について知ったことの中で、最も大切なことがあります。それは、

7月

## 17日 礼拝メッセージ例

イエス様が救い主キリストであることです。アンデレたちは、自分たちを救う、救い主キリストに出会うことができ、大変喜びました。

皆さんは教会学校で、イエス様が素晴らしいお方であることを、よく聞いているでしょう。そのイエス様を心から知りたいと願っていますか？イエス様は、イエス様を知りたいと求める人に、多くのことを教えてくださいます。皆さんは、その救い主イエス・キリストに出会っていますか？

## イエス様を伝えたアンデレ

救い主キリストに出会ったアンデレが、まずしたことは何でしょうか？「シモン、聞いて！すごいニュースがあるよ。絶対に驚かないでね。実は、昨日、救い主キリストに出会ったんだ！」とアンデレは、兄弟シモンにイエス様のことを伝えたのです。でも、それを伝えただけではありませんでした。アンデレは、シモンをイエス様の所まで連れて行ったのです。アンデレにとってイエス様に出会った喜びは、自分だけでとどめておくことができないほどの喜びだったのです。また、アンデレは、シモンにも、イエス様によって救われて欲しいと願っていたでしょう。

皆さんは、罪を取り除かれるイエス様によって救われ、心にすばらしい喜びをいただいていますか。

イエス様を信じる人には、罪の赦しと永遠の命、そして天国への希望が与えられています。また、神様に愛されていることを知ることができます。これは本当に大きな恵みです。この恵みをいただいて喜んでいるなら、お父さんやお母さん、兄弟や友だちにイエス様を伝えたいのではないでしょうか。そして、イエス様のことを聞くことができる教会に来て欲しいと願うでしょう。

イエス様を紹介されたシモンは、イエス様の弟子となり、やがて多くの人たちにイエス様による救いを証する人になりました。そして、シモンによって多くの人たちが救われていきました。その結果、イエス様の恵みがこの日本にも伝えられたのです。

## まとめ

皆さんもアンデレのように、すばらしいイエス様に出会い、喜んでイエス様を伝えていく者にさせていただきますでしょう。

♪すくいの主イエスに♪（ホーリネス子どもさんびか95）



## 聖書 ヨハネ2・1～11

## テーマ 変化をもたらすキリスト

## 序論

(高橋頼男)

水が良いぶどう酒になるという変化は、自然界のそれなりの過程と熟成期間を経て可能であることはよく理解できます。しかし、それらの手続きを全部省いて一瞬で水がぶどう酒に変化するというのは、もう奇跡としか言いようがありません。

主イエスは、ガリラヤのカナにおける結婚式に招かれ、その宴において最初の奇跡(しるし)を行われました。

## 一、「ぶどう酒がなくなる」(1～3)

イエスラエルの結婚のお祝いは一週間も続いたようです。人々にとってこの祝いは特別な楽しみの時、その間、人々は共に大いに喜び楽しみました。そして、その喜びと楽しみを中心にごぶどう酒がありました。しかし、宴席の真ただ中でそのぶどう酒が尽きてしまったのです。理由は、イエスの弟子たちが大勢で押しかけたからとも推測されます(参照・研究資料)。とにかく、イエスも弟子たちも祝宴に参加し、婚礼の喜びと楽しみを共にしたのです。

結婚の主催者側としては、集まってくれた客に対して大変な失態です。せつかくの喜びの席が台無しになりかねない事態です。

しかし、(イエスも弟子たちも、その婚礼に招かれた)とあるように、その宴席にイエスをお招きし、イエスがそこにおられたということは、本当に大切なことでした。

## 二、「マリヤの信頼、しもべらの忠実」(3～8)

この結婚式で母マリヤは主催者としての何らかの責任ある立場を持っていたようです。つまり婚礼の祝いの席を守る立場にありました。そこで、彼女はこの窮状をすぐさまイエスに訴えました。イエスが必ず何かをしてくれることを信じていたからです。これまでもこのようなことが何度もあったのでしよう。母のイエスに対するゆるぎない信頼がありました。

## ①イエスにありのままを訴える

ああしてください、こうしてください、なんとかしてください、というのではなく、マリヤは現在の窮状のありのままを、簡潔にイエスに告げました。全幅の信頼があったからです。しかも、イエスがなされるのがどのようなことであっても必ず最善をなされるという信頼です。イエスの返事は、拒絶というのではないとしても、決し

て良い返事ではありませんでした。しかし、マリヤの一貫した信頼に変わりはありません。

## ②しもべらに備えを言いつける

さらに、マリヤの信頼は、しもべらにイエスの言われることは何でもするようにと前もって言いつけるところにも表われました。困難や危機の中でなすすべもなく無為に過ごしたり、また怠惰であってはなりません。主に信頼し、期待し、今なすべきことをしっかりと成し遂げることが大切です。

## ③しもべらの忠実な働き

しもべらは、マリヤに言われたように、また、イエスが命じられたように、誠実かつ忠実に、すべての甕にふちまで水をいっぱい入れました。もし、こんなことに何の意味があるかと問い、不審を持つなら、このようなことは決して出来ません。行なったとしても適当なところで役割を済ませたことでしよう。彼らは僕の立場に徹して、言われたとおり忠実に働きました。そして、彼らもまた自分たちの理解を超えてイエスがなされることへの期待があつたのではないでしようか。その期待は見事に答えられたのです。〈水をくんだ僕たちは知っていた〉。奇跡を行われたのはイエスですが、その業に参加したマリ

ヤの信頼としもべらの従順がありました。

## 三、「水がぶどう酒に変わるとは」(11)

しもべらが汲み、持っていった水は、変化して良いぶどう酒となりました。ぶどう酒をなめた料理頭は、その素晴らしい味わいに驚いて花婿を呼んでほめました。このようにイエスはマリヤの訴えに応えて水をぶどう酒に変え、婚礼の危機を助けられました。確かにそれが奇跡の直接の目的でした。しかし、この奇跡にはそれ以上の意味がありました。〈そして弟子たちはイエスを信じた〉。この奇跡の本当の意味と目的は、この奇跡を通して神の栄光が現され、弟子たちがイエスを神の子、救い主と信じるためです。イエス・キリストは人間の罪を赦し、死から命へと救うことのできる神であり、救い主であるということを分からせるためでした。人間の魂の救いほど大きな変化をもたらす奇跡はありません。彼らはイエスをキリストと信じ告白する者と変えられていくのです。

## 結論

危機の中で、キリストは私たちの状況を変え、私たちを変革してくださいます。それは、素晴らしい経験です。わたしたちは、主イエスに全く信頼し、キリストの変革をいただきましよう。

## 研究資料

(中島啓二)

## テキスト

**1 三日目に** ナタナエルの召命から二日後（一日目も数に入れる）。この「三日目」が十字架と復活による栄光を予感させているという説、1・19から数えて七日間となる（1・39でも日付が変わる）ことから、天地創造に比しての「新創造」が提示されているという説もあるが、実際そういう意図があるかどうかは不明。ただしヨハネが受難に多くのページを割いていること、また新創造が主要テーマの一つであること（3・3、20・22等）は確かである。

**ガリラヤのカナ** ナザレの北北東6kmのケフル・ケンナ（記念する教会が二つある）、あるいはナザレの北14kmのキルベト・カーナ（現在は廃墟）。いずれも、婚礼の主人とイエスの家族との親しい関係を説明できる距離。**婚礼** ユダヤの結婚式は多くの客を招いて七日間も行われた。**2 イエスも弟子たちも、その婚礼に招かれた** イエスの母が接待役を務めていたことと合わせ、家族ぐるみの交わりがあったことが推測される。このとき、弟子たちが

一緒に出席したことも、ぶどう酒の欠乏の一因かもしれない。

**3 ぶどう酒がなくなった** 来客は相応の祝儀を持参することが通例であったので、ぶどう酒が無くなることは、主人の社会的評判を落とすことにつながった。**母はイエスに言った** 困ったときは、このようにイエスを頼りにしてきたのであろう。この時も窮状をありのままイエスに伝えた。

**4 婦人よ** 通常は母親に対して用いない、丁寧だが距離を置く呼びかけ。決して無礼な表現ではない。イエスの助けを必要とする者は、たとえ母であつても、母と子の関係に基づいてそれを求めるべきでないことを示す。**あなたは、わたしと、なんの係わりがありませんか** 聖霊を受け、御父から遣わされた使命を果たすための力をお受けになったイエスにとっては、父の御心に従うことが、最優先されるのである。**わたしの時は、まだきていません** ヨハネ福音書において「時」（ $\tau\acute{o}\varsigma$   $\chi\rho\acute{o}\nu\alpha$ ）は、十字架と復活による栄光の時を指し示す。その時はやがて来る（17・1）のだが、今はまだ来ていないのである（7・30、8・20）。**5 母は僕たちに言った**… マリヤは、イエスの一見不親

切に思える答えの中にも、その真意のかげらを汲み取り、彼に託すならば、問題は解決するに違いないと信じるに至った。ここにマリヤの強い信仰を見出すことができる。

**6 ユダヤ人のきよめのならわしに従って** この「水」は手を洗う、器をきよめるといった宗教的儀式のために用意されたものであり、旧約の律法を象徴している。イエスはそれを、よりよいものに置き換えてくださった。**四、五斗** 2く3メトレテス（1メトレテスは約39リットル）。**石の水がめ** 陶器などと違い、石のかめは宗教的な汚れを受けることがないので、一般によく用いられた。**六つ** 完全数に一つ足りない数字で、律法の不完全さを象徴している。

**7 彼らは口のところまでいっぱいに入れた** 僕たちはマリヤに命じられたとおりに、イエスの指示に完全に従った。

**8 料理がしら** 料理やぶどう酒について責任ある立場。**ぶどう酒になった水** 水をぶどう酒に変えたイエスは、律法を「廃するためではなく、成就するために」（マタイ5・17）来られた。この方にあつて、古い律法に代わる「霊とまこと」（4・24）による新しい礼拝が始まるのである。**10 初めによいぶどう酒を出して…** 時の経過につれて人

々の感覚は鈍くなつていく中で、そうすることは世の常。しかし神の恵みはそうではない。末広がりの恵みである。

**11 しるし** 単なる奇跡ではなく、その背後にある霊的な意味を悟らせるもの。この福音書に記されている7つのしるしのうちの最初のものである（他に4・46く54、5・1く9、6・1く14、16く21、9・1く12、11・1く44）。**その栄光を現された** 「わたしたちはその栄光を見た」（1・14）。

受肉された言であるお方が、その創造の力をあらわされた。「神の国」はしばしば祝宴にたとえられ（マタイ8・11他）、ぶどう酒はそれを特徴づけるものである（イザヤ25・6）。カナの婚宴においてあらわされたイエスの栄光は、御子こそが神の国の恵みを世にもたらすお方であることを示している。モーセの最初のしるしは、水を血に変えることであつた（出エジプト7・20）。それに対し、イエスが水をぶどう酒に変えられたことは、イエスが古い律法の受領者をはるかにしのぐ、新しい命の授与者であることを力強く示している。**弟子たちはイエスを信じた** 十字架と復活の栄光へとつながっていくこれらのしるしを通して、弟子たちの信仰は強められていく。

参考図書 7月10日分と同じ。



## 聖書

ヨハネ2・1〜11

## タイトル

イエス様によって変えていただこう！

## 暗唱聖句

それなのに、あなたはよいぶどう酒を  
今までとっておかれました。

ヨハネ2・10

## 目

## 標

キリストの变革を体験する者となる。

## 導入

(飯田勝彦)

皆さんは、手品が好きですか？ 白いハンカチをシルクハットの中に入ると、そのハンカチが白い鳩に変わったたり、何も手に持っていないのに突然、トランプが出てきたりする手品があります。これを見ると本当にびっくりしますね。手品にはすべて種や仕掛けがあります。でも、イエス様は手品ではなく、奇跡を行われる方なのです。

## 水をぶどう酒に変えたイエス様

ある時、イエス様と弟子たちは、ガリラヤ地方にあるカナという町で行われた結婚式に招待されました。今でも、結婚式の後には披露宴があり、家族や親戚、友人の人たちが集まってお祝いします。当時の結婚式は披露

宴も含めて一週間ほど行われたそうです。ですから、結婚式は町のお祭りのような感じだったようです。その婚礼には、食事はもちろんですが、ぶどう酒が出されました。婚礼に参加した人たちは、ぶどう酒を飲み、歌を歌ったり、踊りを踊ったりと、楽しく婚礼を盛り上げたのです。

しかし、しばらくするとイエス様のお母さんが「ぶどう酒がなくなりました」とイエス様に言ってきました。婚礼を盛り上げるためには、ぶどう酒はとても大切でした。また、ぶどう酒がなくなれば、参列した人たちに対して失礼になります。母マリヤは、イエス様ならなんとかしてくれるだろうと思ったのでしょう。イエス様は空の水瓶六つに「水をいっぱい入れなさい」と僕たちに言われました。僕たちはイエス様の言われる通りにしました。するとイエス様は「これを料理がしらのところに持って行きなさい」と言われたのです。婚礼に必要なのは、水でしたか。いいえ、ぶどう酒です。僕たちは、その水がめを料理がしらの所にもって行くと、何とそれはすべてぶどう酒に変わっていたのです。料理がしらは非常に喜び、花婿をほめました。でも、僕たちはそれがどこか

7月

## 24日 礼拝メッセージ例

ら来たのかを知っていたのです。

イエス様は、水をぶどう酒に変えるほどの奇跡を行うすばらしいお方なのです。

### 私たちを変えてくださるイエス様

弟子たちは、バプテスマのヨハネから、イエス様がバプテスマのヨハネよりもまさる方であると聞いていました。弟子たちは、今までイエス様と一緒に生活しました。そして、イエス様こそ、「神の小羊」であることも知っていたのです。しかし、この奇跡を見た後、彼らはイエス様を信じる者に変えられたのです。

イエス様は、天に上げられる時まで、このぶどう酒の奇跡だけではなく、他にも多くの奇跡を行われました。皆さんも、いくつか挙げることができるでしょう。でも、イエス様はそのような奇跡を行うためにこの世にいられたわけではありません。私たちがイエス様を信じる者に変えられるためにいられたのです。イエス様を信じる時、私たちは罪人から救われた者に変えられます。不安や恐れの中から、喜びと感謝の心に変えられます。また、神様を愛し、人を愛するように変えられるのです。

Nさんは小学生の時、教会学校へ行っていました。でも、お父さんの転勤で引っ越してから教会から離れてしまいました。それから、数十年後に再び、教会に通うようになりました。聖書のお話を聞いているうちに、自分が罪人だと気づきました。そして、救われたい！とイエス様にすべての罪を告白し、救われたのです。Nさんは、イエス様を信じてから、いつも前向きに生きて行く心に変えられたそうです。

### まとめ

イエス様は、皆さんが苦しく、悲しい生活を送ることを願ってはおりません。心から喜びに満ちて生活できるように変えたいと願っておられます。イエス様は、あなたを心の底から変えてくださるお方です。もう、イエス様によつて変えていただきましたか。まだの人は是非、イエス様を信じて喜びの人生へと変えていただきましょう。

♪すくいの主 イエスに♪

(ホーリネス子どもさんびか 95)



## 聖書 ヨハネ5・1〜9

## テーマ 癒しをもたらすキリスト

## 序論

(高橋頼男)

ユダヤ人の祭りがあつて、イエスはエルサレムに登られました。しかし、イエスの足は聖なる儀式が行われているエルサレム神殿ではなく、ベテスダの池に向かいました。そこにも多くの人々が集まっていますが、明らかに、そこは祭りの雰囲気とは異なつた場所でした。イエスは一人の男を見られ、その病気がもう長い間のことなのを知り、〈なおりたいのか〉と問われました。彼は自分に心をかけてくれた見知らぬ人に、積り積もつた心の内を吐き出します。しかし、イエスはそのような彼に、「起きよ、床を取りあげて歩め」(文語訳)と命じられました。すると、「この人ただちに癒え、床を取り上げて歩めり」(文語訳)とあるように、ただちに癒され、歩みだしたのです。

## 一、空しい光景、空しい宗教(2〜5)

その場所は何とも言えない倦怠感、空しさ<sup>けんたいかん</sup>と失望が漂っていました。そこには二つの池を囲むようにして五つの回廊が備えられていました。多くの病人、盲人、足のなえた

者、やせ衰えた人々が毎朝この池に連れて来てもらい、一日をただひたすら池の水の面が動くのを待つて横たわっていたのです。昨日も、今日も、そしてたぶん明日も…。それは、気まぐれな天使がこの池を訪れるとき水を動かすことがあるのですが、その時真つ先に入る者は、どんな病気にかかつていても癒されると言い伝えられていたからです(3〜4節は異本による説明。新改訳第三版では省かれている)。神殿のたいそうな祭儀やユダヤ人たちが堅く守っていた安息日律法は、池の周りの人々を癒すことも救うこともしません。彼らは一縷<sup>いちろう</sup>の望みを異教的な言い伝えに託し、それにすがるほかないというありさまです。私たちも周囲をよく見回してみましよう。私たちの宗教、私たちの礼拝が何であるかが問われ、探られているかも知れません。

## 二、なおりたいのか(5〜9)

イエスは、三十八年の間病気に悩んでいる人が横になっているのを見られました。この人の病気は彼の罪から来たものでした(14)。もしこの罪が大人になってからのものなら、この人はすでに六十歳にはなつていたでしょう。生涯のほとんどをこの病気で苦しみ、病人としての環境で過ごしてきました。イエスが問われた〈なおりたいのか〉

という言葉は、病んで苦しんできた者に対する配慮を欠いた冷たい言葉のように思われます。しかし、イエスの言葉は彼を見、よく知った上での言葉です。長く病気で苦しんできた者がなりたいのはあたりまえで、そのため今日も池に來ているのです。しかし、彼の本音は別のところにあります。病人として年月をこままで重ね、今ではもう本気で治るといふことを考えることも出来なくなっていたのではないでしょう。もし、奇跡が起こり治ったとしても、今まで他人の憐れみと好意に任せて生きてきたのに、急に自立を迫られても困るといふ本音もあったでしょう。これまでの闘病生活のすべての涙と汗と汚れのしみ込んだ臭う床には、他人には分からない離れがたい愛着があったかもしれません。「他人が問題なのです。人に思いやりがないのです」と、自己憐憫から次々にくりだされる他者非難は、決して真剣に『自己』と対決しようとする人間逃避の言葉です。イエスは、彼の弁解を無視するかのように、強い語調で彼の意思を揺り動かす言葉を語りました。「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」と。すると、この人はすぐにいやされ、床を取り上げて歩きだしました。

イエスは、私たちの本音を見ぬかれるお方です。私たちの他者非難と弁解を空しくし、私たちの意思を揺さぶり、私たちに本気で問い、立ち向われます。そして、私たちに力あるみ言葉を語られます。その時、私たちの内なる病は癒され、しがみついていた床は取り上げられ、新しい自立した主にある歩みを備えてくださるのです。

### 三、わたしも働くのである(17)

主はこの癒しの出来事について、安息日にこのようなことをしたと責めるユダヤ人に向かつて、「わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのである」と答えられました。無力な儀式や律法ではとうていなし得ない真の癒しと救いを成し遂げるために、イエスはみ父にならい、私も働くのだと言われました。「罪に囚われた魂をその束縛から解放し、真の安息へと招く神の働きは、休むことなく続けられています」(研究資料)。私たちもこのイエスのお働きを共に担わせていただくため、聖霊に満たされ、主の情熱を注がれ、ご奉仕に励みたいものです。

### 結論

きよう、私たちの信仰が問われています。主の前に立ち、主のことは癒され、救いに与り、立ちあがりましょう。

## 研究資料

(中島啓二)

ベテスタの池でイエスは、一人の男を長年の患いから解放された。この記事は、すぐ後に続く安息日をめぐるやりとり(10〜18)と密接なつながりを持つている。すなわちユダヤ人たちは、この男の病が癒されたという喜ばしい事実よりも、安息日にその癒しのわざ(厳密に言うところ、「床を取り上げよ」という命令)がなされたということとを問題視した。そして律法違反を教唆したとしてイエスを糾弾したのである。当時のユダヤ教では、安息日の禁止事項を39種<sup>234</sup>項目と、驚くほど細かく規定していた。床を取りあげる行為はその一つに抵触したのである。しかし「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない」(マルコ2:27)。人が、律法をお与え下さった神の御心を離れて、ただ律法の字句を守っている、全く無意味なのである。「わたしの父は今に至るまで働いておられる」(17)とあるように、罪に囚われた魂をその束縛から解放し、真の安息へと招く神の働きは、休むことなく続けられている。イエスはベテスタの池で男を癒したことによって、安息日に関する律法を犯した

のではない。それどころか正反対に、イエスは真の安息をその男にもたらすことによって、安息日の本当の意味、そこに込められた神の御心、すなわち救いへの情熱を世にお示しになったのである。

## テキスト

**1 ユダヤ人の祭** この祭りは仮庵(かいは)の祭りのようだが定かでない。しかし何の祭りであったかよりも重要なことは、その日が安息日であったことである。

**2 ベテスタ** 池の名前については写本によってばらつきがある。前世紀にクムランで発見された銅の巻物に、ヘブル語でベテスタイン(ベテスタの双数形)と書かれていることから、ヘブル語名はベテスタで、それがアラム語でベトザタとなるようである。伝統的に「憐れみの家」の意とされているが、「注ぎ出る場所」が、より正確な意味かもしれない。**五つの廊** この池は双子の池であったようである(前述の双数形もそれを示している)。今日、イスラエル博物館に展示されているミニチュアの復元模型を見ると、二つ並んだ池を「日」の字の形で取り囲むように、四方と中央に屋根付きの廊が五つ設けられている。

**3～4** 「」の中の部分は後代の写字生（写本を書き写す人）が説明のため挿入したものと考えられているが、男の返答（7）を理解する上で、大いに参考になる。癒しの社や池という概念は、アスクレーピオスに代表されるギリシヤの偶像の影響ではないかと考えられている。もちろんユダヤの指導者たちは、池のそのような神秘的効用を認めていなかったであろうが、病で苦しむ人々にとっては、薬にもする思いで頼りたくなる言い伝えであつたらう。

**5 三十八年のあいだ** イスラエルが不信仰のゆえに荒野で余分に過ごした期間と同じである（申命2・14）。この38年という長さはこの池のいやしの効力が当てにならないことを強く示している。それに対して、イエスはただ一言をもって男をお癒しになったのである。なお、この男が長年にわたって四六時中その池の廊にいたということではなく、池の動くのが期待されるときを見計らって、定期的にそこへ連れてきてもらっていたと言つてことであらう。

**6 なおりたいのか** 「何か願いがあるのか」（1・38）と二人の弟子に尋ねられたように、イエスは、この男にも信仰の一つの側面として、意志を確認しようとされた。

**7 主よ、水が動く時に、わたしを池の中に入れてくれる人がいません** しかし彼の答えはすべてを他人のせいにする不平であつた。自分の意志の有無についての返答を避け、問題を機会の有無へとすり替え、言い訳に終始したのである。そこには、直前の記事（4・46～54）に登場したカペナウムの役人のような強い信仰は見られなかった。けれどもイエスはあわれみ深いお方である。そんな男を見捨てず、彼の中から信仰の応答を引き出してくださったのである。

**8 あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい** 床とは薬でできたむしろのようなものであつたと考えられている。それは用が済めば、容易に丸めて担ぐことができた。

**9 すると、この人はすべにいやされ** 彼を癒したのは、紛れもなくイエスの言葉であつた。その言葉に従順に応答する意志さえも、イエスは彼に与えられたのである。**その日は安息日であつた** だが、ユダヤ人たちの関心事は、男が癒されたことではなく、その日が安息日だったことであつた。そして話は安息日論争へと発展していくのである。

**参考図書** 7月10日分に加えて、The Anchor Bible Dictionary, Vol.1.

## 聖書

ヨハネ5・1〜9

## タイトル

新しい人生に向かって立ち上がるう

## 暗唱聖句

起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい。

ヨハネ5・8

## 目 標

キリストによる癒<sup>いや</sup>しを頂いて、立ち上がる。

## 導入

(飯田勝彦)

もし、皆さんのお友だちが「イエス様ってどんな人？」  
 って聞かれたらどう答えますか。今まで何回もイエス様  
 についてお話を聞いて来ましたがね。イエス様は、私たち  
 の罪を取り除いてくださる方、また、心を変えてくださ  
 る救い主でしたね。

皆さんは、これを頭だけで知っているのではなく、体  
 験しているでしょうか。イエス様のすばらしさを体験し  
 ている人は、もっとイエス様のことを知りたくなつてき  
 ます。

今朝の箇所より、イエス様は、私たちをいやして新しい  
 生き方に導いて下さるお方であることを見てみましょう。

## 病が癒された人

皆さんは、インフルエンザにかかって、学校をしばら  
 く休んだことがありますか。お医者さんから「一週間くら  
 い、薬を飲んで休んでいれば治りますよ」って言われた  
 ら、治るという希望がありますね。でも今朝の箇所には、  
 38年間も寝たきりになっている人が出てきます。もし、  
 皆さんがこの人と同じ立場ならどんな気持ちで毎日を過  
 ごすでしょうか。皆さんなら今から38年後には、何歳に  
 なっていますか。もう、りっぱな大人になって仕事をし、  
 結婚しているかもしれません。もし、病気で仕事もでき  
 ず、一人ぼっちであつたら本当に辛いですね。

この人は、「ベテスダ」（あわれみの家、という意味）  
 という池の近くに横たわっていました。恐らく、家族の  
 誰かが彼をここに連れてきたのでしょう。この池は不思  
 議な池で、年に数回、池の水が動く時がありました。そ  
 の時に、その池に入る者は病気が癒されると言われてい  
 たのです。この人も、水が動くたびに「われ先に！」  
 と池の中に入ろうとしますが、一人では歩くことができず、  
 池に入れませんでした。また、彼をあわれんで池に運ん  
 でくれる人もいなかったのです。

そこに、イエス様が来られました。イエス様は、彼を見

7月

# 31日 礼拝メッセージ例

たとき、彼が長い間病氣であることを知り、「なおりたいのか」と言われました。皆さんがこの男性だったらどう答えますか。この男性は「治りたいです」と答えてはいません。彼の言葉を見ると、彼は「だれも自分を助けてくれません。自分の病氣なんか一生、治りませんよ」と、人生をあきらめていたのではないのでしょうか。

するとイエス様が「起きて、床を取り上げ、そして歩きなさい!」と言われたのです。「イエス様は、むちゃなことを言われるなあり、38年間も病氣で寝ていた人が立てるわけないでしょう」と思いますよね。でも、不思議なことが起こりました。何とこの人は、立ち上がり床を担いで歩きだしたのです。

## 新しい人生に導かれるイエス様

この人は、病があるために苦しい人生を送らなければなりませんでした。でも、やがて自分を癒してくださいました方がイエス様だと知り、彼はイエス様によって新しい人生に導かれたのです。

皆さんは、この人のように重い病をわずらっていないかも知れません。でも、病よりも恐ろしいものがあります。それは罪です。もし、心が罪という病におかされているな

ら、この人のように辛い人生を歩まなければなりません。そしてこの罪の病は決して、自分を癒すことはできません。イエス様だけが癒すことがおできになるのです。

Iさんは長い間、心の中にある重く冷たい罪を抱え苦しんでいました。そして、それは決して癒されることはありませんでした。このまま苦しんで生活するしかないと思っていました。でもある時、近所にいるクリスチャンと出会い、教会に行ってみました。そこでイエス様のお話しを聞きました。そして、自分の罪を赦していただきたいと思い、イエス様を信じて救われました。するとIさんの心は晴れやかになり、イエス様に愛されイエス様を愛して歩む、新しい人生に導かれて行つたのです。

## まとめ

イエス様を信じる人は心が癒され、新しい人生へと立ち上がって行くことができます。イエス様を信じましょう。

♪どうしてわかるかな♪

(ホーリネス子どもさんびか 61)





## 聖書 創世記12・1～9

## テーマ 神による旅立ち

## 序論

(金井信生)

カルデヤ（現在のイラク）のウルに住んでいたアブラハム（最初の名はアブラム）は、主の導きに従ってカナンの地（現在のパレスチナ地域）に移り住みました。主はアブラハムに「あなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう」と約束されました。やがてアブラハムの子孫はイスラエル民族となり、救い主キリストがその中から誕生します。つまり、神の救いのご計画は、アブラハムから始まっていきました。

主の言葉には、「国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい」という命令と、「あなたを祝福」という約束が組になっています。アブラハムは主の約束を信じて、命令にそのまま従います。後に「信仰の父」と呼ばれる生涯の第一歩でした。

## 一、父の家を離れて

「父の家を離れる」とは、目に見える財産に頼らないで、主の言葉だけに従うことです。アブラハムには財産もありましたし、同行を願う人たちもいました。ウルの町にとどまっていれば、不自由なく暮らすことができただけでしょう。しかし、アブラハムが求めたのは、目に見える財産を受け継ぐことではなく、神から祝福されることでした。実際、アブラハムは、移住したカナンの地で生涯家を建てることなく、天幕住まいでした。地上の宝ではなく、「神が設計者であり建設者である堅固な土台を持つ都を待望していた」（新共同訳 ヘブル11・10）からです。アブラハムに続いて記されるイサクやヤコブ、またヨセフもそれぞれ、父の遺産ではなく神の祝福を求めて主に従いました。私たちも文字通りの財産や、時には信仰の遺産を受け継ぐこともあります。しかし、いずれにしても主が「私を祝福しようとしておられる」ことを信じて、待ち望み、み言葉に従う信仰があるでしょうか。

## 二、わたしが示す地に行きなさい

これも、アブラハムが自分の願いや考えではなく、ただ主の導きに従ったことです。カルデヤ地方は豊かな土地

8月

## 7日 聖書講解

で、その当時、世界の最先端を行く文明・文化の地です。それに比べればカナンは辺境で、人も少ないところです。それもアブラハムは「カナンの地」と初めから示されたのではなく、「行く先を知らないで出て行つた」(ヘブル11・8)のです。どこに導かれるかが問題ではなく、「わたしが見す地」であれば、どこでも従つたのがアブラハムの信仰です。

わたしたちそれぞれにとつて、主が示される地とはどこでしょうか。それは、豊かであってもなくても、楽であってもなくても、主が共におられるところであり、やがて帰るべき天の御国への途上にあると確信できることです。聖書に出てくる信仰者たちは、主が共にいてくださることを、何よりの祝福と受け取り、地上では「旅人であり寄留者」であることを自ら言いあらわし、「天にあるふるさと」を熱望していました(ヘブル11・13-16)。

### 三、祭壇を築いて、主の名を呼んだ

アブラハムは、カナンへの移住後も何度か住むところを変えますが、いつも、まず祭壇を築き、礼拝をささげています。

この礼拝の姿から教えられるのは、「祝福されたから礼拝する」のではなく、「約束を信じて礼拝する」ということです。(あなたがたいなる国民と)すると言われても、アブラハムの正統な子どもはただ一人であり、一つの民族が生み出されるまでには数百年かかりました。またキリストの誕生までは千年百年もたっています。「望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認する信仰」(ヘブル11・1参照)、これもまた神からの祝福です。

また、祭壇を築くのは、主の臨在が確かであり、身近であるので、礼拝を第一にし、主体的に献げる姿です。「すべて主の名を呼ぶ者は救われる」(ヨエル2・32)。主の約束は、アブラハムから始まりました。主は今も、一人一人の名を呼んで「あなたを祝福する」と約束してくださっています。目に見える富に惑わされず、主からの祝福に満たされた生涯に進みましょう。

### 結論

まことの神を知らないこの世は、自分の利益ばかり求める罪の世界です。その中であつて主の声を聞き、従つて、祝福された生涯に進みましょう。

## 研究資料

(小平徳行)

アブラハムの生涯を通し、彼の信仰を学ぶ。聖書全巻に貫かれている中心的なテーマの一つは「聖別する神」である。バベルの塔以降、再び罪と混乱に陥った人類を神の救いの恵みに導くために、神はアブラムを聖別された。救いの出来事は、神の言葉と人間の信仰によって形づくられる。1〜3節はアブラムの召命、4〜9節は彼の従順について記されている。

## テキスト

**1 時に主はアブラムに言われた** この命令と約束はいっ語られたものだろうか。使徒7・2〜3によると、彼がハランに住む以前のウルに住んでいた時となる。しかし4節によればハラんで語られたと考えられる。以上からアブラムがすでにウルで与えられていた命令をハラんで再び示されたと考えてよい。**あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ** この命令は徹底した分離を要求している。父の家を離れ土地を手放すということは、生活の保証を手放すということを意味しており、これは信仰のテストであった。**わたしが示す地** カナンの地の方向

であることは分かっていたが、アブラムにとって未知の地であった（ヘブル11・8）。

**2 アブラムに対する約束は、アブラム（の子孫）が大きな民となること、そして地上のすべての民族がアブラム（の子孫）によって祝福されることである。大いなる** 数だけでなく、神の前の偉大性も意味している。国民（**ヘ**ゴイー）領土と民を含む言葉。一般には異邦人の国々を指すが、ここでは特に他民族と比較して、イスラエルの国の偉大性を語るために用いたと考えられる。**祝福の基となる** アブラムへの祝福は、彼だけのものではなく、彼を通して多くの人々に祝福が及ぶ。

**3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し** 人々がアブラムをどのように扱うかによって、彼らの定めが決まってしまうような立場に、アブラムは置かれることになった。**地のすべてのやからは、あなたによって祝福される** これは後に、キリストを信じるすべての者（異邦人であっても）が義と認められ、この祝福が及ぶことをあらかじめ示したものである（ガラテヤ3・8）。

**4 主が言われたように** アブラムの単純率直な従順を表現している。故郷、親族から離れ、行き先が不明確な中

で従うことは困難なことである。それにもかかわらず従ったのは、やみくもな行為ではなく、最善をなさる神への信仰によるものであった（ヘブル11・8）。アブラムは、現在また将来の生活の保証のすべてを主の御手にゆだねたのである。ハラン「カラン」（使徒7・2）とも言われている。メソポタミヤの都市で商業の中心地、ウル同様、月神を主神とする偶像崇拜の地であった。アブラムの父テラム、偶像崇拜を行っていた（ヨシユア24・2）。

**5 すべての財産…携えて** もはや戻ることはないという決意の表れ。

**6 その地を通して** アブラムの旅は、まずカナンの地深く、中部にあるシケムまで入る。さらにベテルとアイの間を通って（8）、南の極限ネゲブまで及ぶ（9）。ヨシユア24・3において、主によってアブラムが「カナンの全地を導き通った」と言われている。カナンの全土がアブラムに与えられることのしるし（13・17参照）。

**シケム** シケムはゲリジム山とエバル山の間の谷間にある要地。**所（ヘ）マールコーム** 本来は単に「場所」を意味するが、文脈によって特別な意味を持ちうる。新共同訳では「聖所」と訳されている。モレ「占うもの、導くも

の」の意。**テレビンの木** 新改訳、新共同訳では「樺の木」。樹齡、数百年〜千年で高さ15メートル位まで成長する。神木としてカナンの祭儀の中心であったといわれる。そうであれば、アブラムがここに祭壇を築いた（7）のは、カナンの宗教の拠点に真の神の臨在を示したということになる。**カナンびとがその地にいた** カナンの地は無人の野ではなかった。

**7 あなたの子孫に** この「子孫」は単数形であるが、単数の意味にも、複数の意味にも用いられる。これはアブラムの子孫であるユダヤ人を指すが、究極的にはイエス・キリストを指す（ガラテヤ3・16）。**この地を与えま**  
**す「わたしが生ずる地」（1）**がここであることを示す。カナンびとがすでに住んでいたことは、神の約束を疑わせるものとなり得たが、神はアブラムを励ますために約束を更新し、強調した。**祭壇** 約束の地において最初に築かれた礼拝の場であった。

**9 ネゲブ** 「南」と訳されているものもある。現在の死海の南西に広がる乾燥した高地。約束の地の南限。

**参考図書** 舟喜信「創世記」『新聖書注解・旧約1』（いのちのことば社）他

聖書 創世記12・1～9

タイトル 従おう！ 神様が導かれるままに

暗唱聖句 あなたは国を出て、親族に別れ、父の

家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。

創世記12・1

目標 罪から離別し、神の導きに従って生きる者となる。

## 導入

(和田治)

夏真っ盛りですね！ みんな、元気ですか？ 今日から、夏の太陽のように燃える心で神様に従って生きた、アブラハムっていう人のことを学びますよ。最初の頃はアブラムという名前でした。彼の信仰の歩みのスタートを見てください。

## 罪からはなれたアブラム

ある時、神様がおっしゃいました。「これから旅に出なさい。親せきや親しい人たちも国も捨てて出かけるのだ。行く先はわたしが教えるから、ただ言われたとおりにするのだよ」。びつくりするようなご命令ですね！ みんなは、今住んでいる町に、いつごろからいるのかな？ 生まれた頃から今までずっと同じ町に暮らしてきた人もいます。アブラムにとっては、なんと、七十五歳になるまで住

み慣れたところ！ その場所からも親しい人たちからも、離れるのはとっても辛いことだったと思います。でもアブラムは旅立ちました。しかも、行き先もはっきりとは分からないのに！ どうしてでしょう？ それは、神様の導きだったから、神様がお命じになったからです。アブラムは、自分の気持ちや願いよりも、神様のお言葉を第一にしたのです。たとえ、神様のおっしゃる通りにすることが大変な、辛いことでも、出来れば避けたいようなことでも、「それが『神様のご命令』なら従おう」と、アブラムはそう決めていたんですね！

神様はどうして、「旅に出なさい」とおっしゃったのでしょうか。実は、それまでアブラムが住んでいた国には、人間が作った偽物の神、偶像がいっぱいあったんです。アブラムのお父さんも、死ぬまで偶像礼拝をしていました。神様はアブラムを罪からきっぱり離れたかったのですね。

## 祝福を約束された神様

アブラムに神様がお与えになったのは、「命令」だけではなく、あなたを祝福する。それだけでなく、あなたのおかげで、ほかの多くの者も祝福されるようになる」。つまり、神様はアブラムが従うならば本当の幸せでいっぱいにしてあげると約束してください

8月

## 7日 礼拝メッセージ例

ったのです。それは、大金持ちにしてあげる、とか、何の苦勞もない暮らしを与えてあげる、という意味だったのでしょうか。いいえ。そういう幸せを求めるなら、むしろ旅立たない方が良かったでしょう。すでに豊かな良い暮らしができていたのですから。アブラムが求めたのは、目に見える幸せではなく、神様からの祝福でした。それは、「神様が一緒にいてくださる、だからわたしは安心です、幸せです！」っていう、本物の安心なんです。これこそ最高の祝福なのですね。

アブラムが神様の祝福を信じて神様のご命令に従ったので、やがてアブラムを通して、多くの人々が幸せになりました。私たちも同じなのです。神様からの祝福を信じて神様の導きに従うとすぐに従っていくとき、そこには必ず本物の祝福が備えられているのです。

## 神様に従ったマザー・テレサ

ノーベル平和賞という世界的な賞をいただいたマザー・テレサという人がいましたね。「死を待つ人々の家」をインドのカルカッタ（今のコルカタ）で始めた人です。彼女はともにお金持ちのお家に生まれ育ちました。インドで神様のために働きたいという願いを十二歳の頃から持っていた彼女は、十八歳のとき故郷を離れてインドに旅立ち

ました。それから二十年近く、先生として働きましたが、ある時、汽車の中で「すべてを捨てて、最も貧しい人たちの間で働きなさい」という神様の声が心にはつきり響いてきたのです。彼女は、神様の導きに従って、全てを捨てて、貧しい人々の中でも最も貧しい人々に仕えるようになったのです。一九九七年九月、世界中の人々が見守る中、テレサは天に召されました。八十七歳でした。彼女が亡くなったとき「神の愛の宣教者会」のメンバーは四千人を数え、百二十三カ国の六百十箇所で、貧しい人々や重い病気の人々、両親がいない子どもたちに仕えるようになっていました。マザー・テレサが神様の導きに従ったことによって、本当に多くの人々に神様の祝福が注がれるようになったのですね。

## まとめ

神様は今も、聖書のみことばを通して、私たちを導いておられます。神様が導いてくださる生き方を選び、神様に従うなら、あなたが祝されるだけでなく、あなたの周りのみんなも祝されるのです！「用いてください！」ってあなた自身を神様に献げて生きよう。

113



## 聖書 創世記15・1～16

## テーマ 神による約束

## 序論

(金井信生)

アブラハムは「信仰の父」と呼ばれています。それは聖書の中で最初に「信仰によって義と認められた」人だったからです。また、決して完全ではない、失敗もある弱さを持ちながら、神の約束を信じ、神に支えられ導かれていく、信仰の生涯を送ったからです。

## 一、恐れへの勝利

アブラハムは、エジプトでの過ちを主に正していただき、ロトを取り戻した勝利によって、周辺からも認められてきました。しかしなお将来への展望が与えられませんでした。主は「あなたを大いなる国民にする」と約束されましたが、子どもが与えられないまま年を重ねてしまいました。

そんなアブラハムに、主は初めて「恐れるな」と語りかけられます。人には様々な欲がありますが、最後に残るのは名誉欲だといわれます。古代社会に生きるアブラハムにとって、子孫が残らないのは、祝福がないことと同じ

でした。主はアブラハムの心の内を知っておられます。「恐れてはならない」というのは、「あなたの不安を、そのままわたしのところにおろさない。わたしに解決があると信じなさい」というメッセージです。

主はアブラハムを外に連れ出して、天の星を仰がせられました。人がまっすぐ歩こうと思ったら、目の前ではなく、遠い目標を目指さなければなりません。アブラハムにとって、子どもが生まれないことは目の前の問題でしたが、主が備えておられる遠大な御計画の中では、小さな一歩にすぎません。私たちが恐れを抱くのも大きく映る目の前の壁ですが、主の目には何の妨げでもありません。

## 二、信仰による義

天の星を仰がせ、「あなたの子孫はあのように」と主が語られたとき、アブラハムは主を信じました。主は何か確かな証拠をお与えになつたのではなく、ご自身が何者であるかをお示しになられました。アブラハムは、神がいるとかいないとかではなく、天地を造られたお方であり、すべてを知り、すべてを支配しておられるお方が

8月

# 14日 聖書講解

おられることを信じました。そして自分はこの方の御手の中にあることを信じ、受け入れました。

〈恐れてはならない〉との主の言葉に続くのは、〈わたしはあなたの盾である〉、そして〈あなたの受ける報いは、はなはだ大きい〉との言葉です。私たちもついつい「報い」の方に目が留まり、心が向きますが、大事なことは盾となつて守つてくださる主の存在ではないでしょうか。

アブラハムは、修行したり勉強したり、努力して信仰を得たものではありませんでした。神の言葉に最初から百パーセント信頼していたというのでもなさそうです。恐れたり迷つたりするアブラハムを、信じる者に変えてくださったのは、主ご自身です。主に選ばれ、守られ、導かれていることを信じる信仰そのものを、主は私たちに与えてくださいました。

## 三、契約を結ぶ

いけにえを二つに裂いて向い合せに置き、間を通るのは、当時の契約を結ぶ儀式です。主はアブラハムと契約を結ばれますが、いけにえの間を通つたのは主だけでした。子孫を大いなる者とし、祝福の基とする契約を実現する

のは、一方的な主のお働きだからであり、人にできるのはただ主を信じることだけだからです。

「約束の地」は、イコール「地上の樂園」ではなく、様々な問題に出会うことを通して、主と結んだ契約を確かなものとしていくところにあるのです。

新約の恵みに生きる私たちも、主との間に契約を結ばせていただきました。それはイエス様の十字架によって信じる者が救われ、恵みの中に生涯導かれるという約束です。アブラハムを導かれた主は、さらにひとり子をも惜しまずに十字架にかけて、私たちを救ってください、さらに神のご真実を現してくださいました。自分の中にはどこにも確かな信仰はありませんが、真実な神がいてくださることが最も確かなことです。主を信じ、その言葉に従いましょう。主の導きと守りを、どんな状況の中でも、日々いただくことができます。

## 結論

キリストを信じ救われた私たちも、信仰によるアブラハムの子孫であり、祝福を受け継ぐものです。主の約束を信じて、望みに生きる者となりましょう。



## 研究資料

(小平徳行)

主がアブラムと契約を結ばれた場面である。実質的にはアブラムの召命のとき（12章）から始まっており、こは契約の確認といえる。

## テキスト

**1 これらの事後** 直接的には前章の出来事と見てよい。**主の言葉が…臨んだ** これは預言者に啓示が与えられるときの典型的な言い回しで、創世記には本章1、4節のみ。実際20・7では預言者と呼ばれている。**恐れてはならない** この時、アブラムは恐れの中にあった。その恐れは前章の東方の王たちからの報復に対する恐れと共に、まだ子どもが与えられていない不安も含んでいる。**盾** 彼の恐れに対し、神が共におられ、盾となつて守られるとの約束。以後、しばしば、神は盾であるとの信仰が告白されている（詩84・11～12、箴言30・5等）。**報い** ソドムの王からの報いを拒んだアブラムに（14・23）、主からの報いが約束される。その内容は無数の子孫（5）である。英欽定訳聖書等では、「主ご自身が報いである」と訳されている。主は報いてくださるお方であると共に、報いそのものともなつてくださる。

**2 わたしには子がなく…あなたはわたしに何をくださろうとするのですか** アブラムは、どんなに大きな報いを受けるといわれても、子どもが与えられていないのはどうしようもない、という不満、失望などを打ち明けた。主の前にありのまま心の思いを注ぎ出すアブラムに、主は確かな約束をもつて答えられた（4～5節）。

**3 わたしの家に生れたしもべ** ハランで守られていた制度では「間接相続人」が認められていた。つまり、子どものない夫婦はしもべを養子として迎え、養子は養父母に対して孝養を尽くす責任とともに、養父母の財産を継承する権利が与えられていた。

**4 あなたの身から出る者が** 老年であるアブラムに子どもが与えられるだろうか、という疑問に対する答えであった。しかしサライによつてということについては、後に信仰の訓練を経なければならなかった（16章）。

**5 天を仰いで…** 主はアブラムに信仰を起こさせるために、夜空に輝く無数の星を見せた。神は何もないところから数えきれない星を創造されたお方であり、人間的に不可能と思えるような約束も、神には可能であることを示した。

**6 アブラムは主を信じた** 主とそのみ言葉への無条件の信頼。**義と認められた** 「義」とは神とのあるべき正しい

い関係にあること。神の約束のことばに対するふさわしい応答は信仰である。使徒パウロはローマ人への手紙4章において、ここを引用して信仰義認を論証している。アブラムの信仰は死人を生かす神を信じる信仰だった(ローマ4・17)。キリスト者は、このアブラムの信仰に倣う者である。

7 約束の続きで、ここからは焦点が子孫から土地に移される。

8 どうして知ることができますか アブラムはまだ自分の土地を持っていなかったため、この約束が確かであることを示すしるしを求めた。これは不信仰を示したのではなく、信仰の問いである。(士師6・36〜40、列王下20・8〜11参照)。逆に、しるしを求めないことによって不信仰が明らかにされることもある(イザヤ7・10〜14)。

9〜10 アブラムの問いに対し、神は契約を結ぶことで応じられた。二つに裂き、裂いたものを互に向かい合わせて置いた この儀式の形式は、特にカルデヤ人の間でよく用いられた(エレミヤ34・18)。真つ二つに切り裂かれたいけにえの間を通り、契約を破った場合には、裂かれたものと同じ状態になることの承認を意味した。ここでは主の臨在(炎の出るたいまつ)だけが裂いたものの

間を通った(17)。これは、この契約の責任は神にのみあることを示しているからであろう。

11 荒い鳥：追い払った アブラムは備えたいけにえを注意深く見守りながら、神の答えを待ち望んだ。ここにアブラムの信仰の戦いが表現されている。

12 日の入るころ 5節〜12節の間に昼の時間が経過していた。深い眠り 神による眠りと考えられ(創世記2・21)、神の啓示を受け得るようにさせられている状態。

大きな恐ろしい暗やみ 13節以下のアブラムの子孫が通るべき苦難の時代を象徴している。

13 他の国 エジプトのこと。四百年の間 四百三十年(出エジプト12・40)の概数。

16 アモリびと 本来はカナン人の中の特定の民族名だが、ここではイスラエル定着以前のカナン人の総称。悪がまだ満ちないから イスラエルが四百年の期間を経なければならぬ理由として、カナン人の罪が関係している。その悪が満ちるまでの期間、イスラエルは待たなければならなかった。つまり後のイスラエルのカナン征服は、神のさばきのゆえになされた正当な事であった(レビ18・24〜25、申命記9・4〜6参照)。

参考図書 先週の他 Wenham, G. J. (Word) 他

## 聖書

創世記15・1～16

## タイトル

信仰はなんて素晴らしい！

## 暗唱聖句

アブラムは主を信じた。主はこれを彼の義と認められた。 創世記15・6

## 目 標

神の約束を信じて生きる者となる。

## 導入

(和田治)

先週はアブラムが、神様の導きに従って、行き先も分からないのに旅立ったことを学びましたね。アブラムは『信仰の父』と呼ばれます。「ええっ？ 彼ってかんべき？」いいえ、失敗もありましたし、怖がりだし、ごく普通の人でした。でも、神様を信じて従ったので、神様から豊かな祝福をいただいたのです。彼の人生を見ると、「神様に信じる信仰ってなんて素晴らしいんだろう！」と気持ちになります。さあ、今日もアブラムに信仰をお与えくださった素晴らしい神様のみわざに注目しましょう！

## 恐れるな！と語られた神様

神様はアブラムに「あなたを大いなる国民にする」と約束されました。なのに、子どもが与えられないまま、ずいぶん年をとってしまったのです。「あゝあ、神様のお言葉

はいっただいどうなったのかなあ」。アブラムのため息が聞こえてきそうです。だって、彼の時代には、子どもがいないうことは神様から祝福されていない証拠だ、とされていたのですから。心は不安でいっぱいだったでしょう。そんなアブラムに、神様は初めて「恐れるな」と語りかけてくださったのです。それは、「あなたの心配を、そのままわたしのところにもっておいで。ありのままにわたしの前に出てごらん」というメッセージでした。

アブラムは心にあつた不安を遠慮なくそのまま神様に告げます。「ああ神様、私に息子がいないのはご存じでしょう。それでは、どんなに祝福していただいても、何の役にも立ちません。息子がいなければ、私の財産はだれか他の人のものになってしまわないですか！」なんだか失礼ですよ？でも、私たち人間が神様にお祈りするっていうのは、思いをそのまま神様に告げるといことなんです。何も遠慮なんかいらないんですよ！

## 主を信じたアブラム

神様はおっしゃいました。「いや、ほかの者がおまえの跡継ぎになることは決していない。おまえの息子が必ず生まれるのだよ」と。そして神様は、彼を外に連れ出して言

8月

## 14日 礼拝メッセージ例

われました。「空を見上げてごらん。星を数えることができるなら、数えてみなさい。あなたの子孫はあのようなでしよう」と。

「ええっ？ な、なんですって？」ちよつと考えてみてください。まだ一人も子どもがなくて、アブラムも奥さんも、もうお年寄りなんです。なのに、星の数ほど、つまり数えきれないほど、子孫が与えられるなんて…。「いったいどうしてそんなことがありえるでしょうか、馬鹿にしないでくださいよ…全然信じられません！」そう言ったとしても、無理ないですよ。

ところが、「アブラムは主を信じた」んです。主なる神様がアブラムに夜空を見上げさせたのは、信仰を与えるためなのです。『そっか！ 神様は何もないところから数えきれない星をお造りになったお方なんだ。私たち人間には『絶対無理だ』と思えるような約束も、主なる神様には『絶対無理だ！』こうしてアブラムは神様とそのみ言葉を心から信じたのです。そして神様は、彼のその信仰を見て「義」と認められた、つまり、「よろしい！ わたしの思いに良く応えてくれたね！」とお喜びになったのです。アブラムは、修行したり努力して信仰を勝ち取ったのではありませんでした。神様のお約束を最初からばっちり

り信じれたわけでもなかったですよ。恐れたり迷ったりするアブラムを、信じれるように導いてくださったのは、主なる神様ご自身です。私たちも同じですね。神様に選ばれ、守られ、導かれていることを信じる信仰そのものを、神様が私たちに与えてくださっているのです。

## 信仰はなんて素晴らしい

イエス様が来られた新約の時代に生きる私たちは、主との新しい約束をいただいています。それは、イエス様の十字架が自分のためだと信じる人は皆救われ、恵みの中にずっと導かれるという約束です。アブラムを導かれた主は、さらに、ひとり子をさえも惜しまずに十字架にかけて、私たちを救ってくださいました。この主なる神様を信じる信仰って、なんて素晴らしいんでしょう！ さんの歌詞のように「信仰あれば強いよ！ 信仰は力になるよ！ …できないなんて言わないで、いつも『できる！』と叫ぼう！」そうです、神様の約束を信じて生きるなら、その神様の力によって、どんなことでも『できる』のですから！！

♪信仰はなんて素晴らしい♪

(ふくいんこどもさんびか 2 25)



## 聖書 創世記19・12・28

## テーマ 滅びからの脱出

## 序論

(金井信生)

アブラハムと別れてロトが選んだソドムの町は、「わらく、主に対して、はなはだしい罪びと」(13・13)の住む町でした。主はいつまでもこの町の罪を見過ごしにすることはできず、滅ぼされますが、ロトとその家族だけが救い出されました。

## 一、滅びの警告

ソドムの町をみ使いが訪れたのは、すでにソドムの悪を知っておられる主が、つぶさにご覧になるためでした。また、もし正しい人がいれば、さばきから逃れさせるためでした。

み使いはロトに、主がこの町を滅ぼそうとしておられることと、その理由が不義によるものであることを警告します。そして、身内の者を連れ出すように命じます。聖い神は、罪をそのままにしておくことができません。罪は自然に消えることはなく、むしろ深まり、広がって

いくからです。正しいものが食い荒らされず、清いものが汚されないために、罪を滅ぼすことは、罰として共に、予防的な意味でも必要でした。

神のさばきの意図は滅ぼすことではなく、生かすためです。ただ罪を罪と思わない者は、さばきの警告を真剣に聞きません。ロトのむこたちは、さばきの知らせに結局耳を貸しませんでした。

## 二、あわれみによる救い

ロトに警告が与えられたのは、アブラハムのとりなしによるものでした。アブラハムは「ソドムの町にもし十人の正しい人がいたら」と祈りました。実際にはロト一人さえ怪しかったのですが、主はあわれみをもって、ロトとその家族を救われました。

夜が明けてなお町を出ることをためらっているロトと妻、そして二人の娘でしたが、(主は彼にあわれみを施されたので)、み使いが直接手を取って町の外に連れ出しました。私たちも「キリストを信じたので救われた」という言い方をしますが、主の救いを信じることができたこと自体、主のあわれみによって聖霊の導きと助けが与えられた

からです。教会に導かれたこと、聖書を開いたこと、誰かの助けを得たこと、みな神のあわれみによるもので、まったく自分を誇ることはないものです。

み使いは「身内の者を、皆ここから連れ出しなさい」とも命じています。「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」（使16・31）との約束は旧約においても同じです。主のあわれみは、アブラハムの信仰を、またロトの存在を通して豊かにあらわされています。

ただ、ロトのむこたちは、滅びの知らせに耳を貸しませんでした。あわれみは豊かにありますが、悔い改めの機会を逃すものにとつて、主のさばきは自ら招いたものとなりました。

### 三、救いの完成のために

ロトはみ使いの手によって町の外に連れ出され、〈山にのがれなさい〉と命じられます。それでもなお従いきらずに、近くの町へ逃れさせてくださいと願いますが、この願ひもあわれみによって聞き届けられました。

しかし、ロトの妻は「うしろをふりかえって見てはなら

ない」と命じられていたのに、〈うしろを顧み、塩の柱になつてしまいました。後ろに残してきたものは、どんなに高価でも、愛着があつても、滅びに通じるものならば、捨てなければならぬものです。

主のあわれみは豊かであり、また力強い御手は私たちを完全に救うことができます。ただ、主は決して強制的ではなく、私たちが自分から主を愛し、主に従うことを求めておられます。

パウロは「恐れおののいて自分の救の達成に努めなさい」（ピリピ2・12）と勧めています。罪を軽んじたり、自分の行いに頼つたり誇つたりすると、たちまち足もとをすくわれるほどに、弱い私たちです。キリストが全生涯をかけて、命を捨ててまで罪と対決し、私たちを救い出してください。恵みを軽んじないで、心いっぱい感謝し、主の恵みの中に身を置く応答が大事です。

### 結論

主は今も、罪の世をご覧になつて心を痛め、救いの手を差し伸べておられます。神に背を向けて滅びに向かう道から向き直り、逃れて救いの道を歩み続けましょう。

## 研究資料

(小平徳行)

ソドムとゴモラの罪が非常に重いために、主はこれを滅ぼされた。その中で、ロトと娘たちだけが救われた。この出来事は、後の時代において罪と罪人に対する神のさばきの象徴となった(申命記29・23、イザヤ13・19、エレミヤ49・17、ゼバニヤ2・9、Ⅱペテロ2・6、ユダ7等)。また、イエスは、神の御業を見ても悔い改めず、また福音を拒む者は、このソドムやゴモラよりも厳しいさばきを受けねばならないと宣言された(マタイ10・15、11・23、24)。特権と祝福が大きいほど、それを拒む者の責任は大きい。

## テキスト

**12 身内の者** 身内の者もロトとのつながりのゆえに救いの可能性が与えられた。

**13 このところを滅ぼそうとしている** 結局、ソドムには10人の正しい者さえいなかった。

**14 娘たちをめぐむこたち** 娘たちがまだ家にいることから、これから結婚することになっていたのだろう。**戯れごと** 新改訳、新共同訳では「冗談」。むこたちは受け入れなかった。せつかく与えられた救いの機会であつ

たが、それを拒む者を救うことはできない。

**15 この町の不義のために滅ぼされる** 警告に従わなければ、その町の不義に自らをゆだねる罪となる。

**16 ためらつていた** ロトはむこたちに警告しつつも、自分ではためらつていた。財産を捨てることだけでなく、むこたちがついてこないために、娘たちを別れさせなければならぬことなどがその原因かもしれない。**手を取って連れ出し** 主はアブラハムとのやりとりでは、このような行為をする約束はされていなかった。**あわれみを施されたので** そのままにしておいたなら彼らは滅びたが、主のあわれみゆえに、ロトとその家族に目を留められた。これもアブラハムのとりなしのゆえである(29)。ロト家族でなくとも、主が人を救われるのはあわれみによるのであつて、人の功績にはよらない(ローマ9・22、24、11・32参照)。

**17 うしろをふりかえって見てはならない** 急がせることと、過去を断ち切ることを命じたもの。自分の意志では町を離れられなかったロト一家にとっては適切な警告であり、厳粛な禁令であつた。

**18、19 どうか、そうさせないでください**… 救われるための命令に対し、それは不可能だから滅びてしまうと考え

ている。神の力を信じるのではなく、自分の納得する方法で救いを求めている。

**21 あなたの願いをいれて** あくまで自分を通そうとするロトに対して、神はどこまでも寛容をもって受け止めている。

**22 わたしは何事もすることができません** 救われるべき者が安全なところに導かれるまでは、さばきをなさらない。さばきは救いの完成に依存している。もしロトが山に逃れることを受け入れていたならば、それがなされるまで、さばきはなさらなかったであろう。主は決して不可能なことは要求されない。**ソアル** 新改訳「ツォアル」、「小さい」の意。以前はベラと呼ばれていた(14・2)。おそらくヨルダン平原南端の死海付近に位置していたと考えられる。この出来事でロトが「小さい町」と呼んだために、それが町の名前になった。後世になってモアブの町として言及されるようになる(イザヤ15・5等)。主の園のように潤っていた地であったが(13・10)、結局ロトたちは、さばきを恐れて、そこから立ち去って山に住んだ(30)。

**24 主の所すなわち天から** 硫黄と火によってソドムとゴモラが滅ぼされたのは、雷を伴った地震によって、噴出

した天然ガスに火がつき、硫黄や噴出した石油にまで引火して巨大な火の海になったということが考えられる。

しかし、さばきの火は限定された時と場所に起こっており、これはあくまでも、神による出来事である。ソドムとゴモラの場合は特定されていないが、死海の南端の湖底に水没していると考えられている。

**26 うしろを顧みた** 残してきた財産、生活を惜しんだためであろう。これは神の命令に対する不従順であり、アダムの罪と同様に決して小さなことではない。主は先に、あわれみを示されたが(16)、ここでは峻厳(きんげん)を見る(ローマ11・22)。**塩の柱** 岩塩の多いこの地域での塩の柱の形成は珍しくはない。イエスは、再臨に伴うさばきの日について警告したとき、ロトの妻を思い出すように言っている(ルカ17・32)。

**27 朝早く** アブラハムは前の日に主にとりなした結果が気になっていた。特にロトの安否を知りたかったであろう。**主の前に立った所** アブラハムが主の前にとりなした場所(18・22)。

**参考図書** 先週の他、Matthew Henry's Commentary



## 聖書

創世記19・12〜28

## タイトル

うしろをふりむいちゃだめ！

## 暗唱聖句

のがれて、自分の命を救いなさい。うしろをふりかえって見てはならない。

## 目標

減びに至る罪の生活から逃れる者となる。

創世記19・17

## 導入

(和田治)

美しい森がありました。草花が、いくつばい咲いています。ふと見ると、板切れが落ちています。その上にもコケや雑草が生えています。板切れをぐっとはがしてみると、なんと、その下はジメジメとしていて、「うじうじうじ」って、ウジ虫のような汚い虫たちがうようよしていました。「うわっ、汚い！」思わず飛びのいてしまいました。太陽の光がどんなに照つていても、それがあたらない場所はじとじと汚なくなってしまうですね。同じように、神様のきよい光に背を向けていると、人間は罪でどんどん汚れていきます。今日は、神様に背を向けて、罪深い汚い生活をしている人々の町が、滅ぼされた出来事について見ていきます。

## 神様の怒り…

先週までアブラムのことを学びましたね。彼は新しい名前を神様からいただきました。それはアブラハム（多くの国民の父、という意味）！その甥にあたるロトとその家族が住んでいた町に、ある夕暮れ、二人のみ使いがやってきました。彼らが言うことにロトはびつくり！

「良く聞きなさい、ロト。私たちはこの町を滅ぼします。家族や親せきを連れて逃げなさい！」

あまりにも汚れた罪が満ち満ちてしまったために、聖なる神様は、罪人たちもろとも町を滅ぼすことに決められたのです。その町の名前はソドムとゴモラ！これ以上放つておいては、罪は他の町々村々にも広がって、取り返しつかないことになってしまいます…。愛の神様は心を痛めつつも、罪をそのままにすることはできません！とうとう裁きの時が来たのです。

そこで、ロトは娘たちと結婚することになっていた若者たちに告げました。「さあ、急いで逃げよう！主なる神様がこの町を滅ぼされるのだよ！」でも、なんとということでしょう、若者たちは「はああ？ 冗談でしょ？」と本気にしません。ああ、罪によって心が鈍くなってしまう、神様のきよい心がちっともわからなくなつたので

8月

## 21日 礼拝メッセージ例

しょうか！皆さんは、神様が与えてくださっている悔い改めのチャンスを生かしていますか？

## 神様のあわれみ

次の朝、夜が明けるころ、み使いたちはしきりにロトをせかします。「さあさあ、ぐずぐずしないで。奥さんと、娘たちを連れて、今のうちに逃げるのです。急いで！さもないと町もろとも滅ぼされてしまいます」。それでもまだ、ロトはぐずぐずしています。と、その時、主なる神様の深いあわれみによって、み使いたちはロトたちの手を取り、町の外の安全な場所に連れ出したのです。そしてこう言いました。「のがれて、自分の命を救いなさい。うしろをふりかえって見てはならない！山に逃げるのです」。山まで逃げる自信のないロトが、近くの小さな町に逃げることを許してほしいとお願いしました。その願いさえもみ使いはかなえてくれたのです。

## うしろをふりかえるな！

太陽がのぼったころ、ロトはその町に着きました。その時、主は天から、ものすごくたくさんの硫黄と火をソドムとゴモラの上に降らせたのです。硫黄というのは、火山のあたりによくある黄色いかたまりで、溶けて流れながらもものすごく臭い毒ガスを出して燃えるのです！

ソドムとゴモラは主の怒りの炎によってすっかり焼き尽くされ、罪深い人々がみな死に絶えました。

ロトの妻もついて行ったのですが、「うしろをふりかえって見てはならない」と言われていたのに、振り返りました。町に置いて来たお金や持ち物や楽しみに、心残りがあつたのでしょうか…。たちまち、彼女はその場で塩の柱になってしまったのです！だめだよね、ふりむいちゃ！

## 罪から離れよう！

ロトたちが主の憐れみによって救われたように、私たちも、自分の良い行いや努力によってではなく、ただ憐れんでいただいて救われました。だから、自分の力に頼って罪を何とかしようなんて考えてはなりません。イエス様の十字架だけに、私たちを罪から救ってくださる力があるのです。そして、罪を決して軽く見てはなりません。愛の神様はきよいお方です。神様を恐れ、心から悔い改めましょう。後ろを振り返って塩の柱になったロトの妻のように、罪深いものに心残りをもってはならないのですね。罪ときっぱり手を切り、神様に喜ばれる光の子どもとして歩みましょう！

♪もうふりむかない♪（教会学校さんびか 86）



# 聖書 創世記22・1～19 テーマ 愛のテスト

## 序論

(金井信生)

主の言葉に従って先祖伝来の地を離れ、信仰の生涯をたどってきたアブラハムも、晩年を迎えています。ようやくひとり子が与えられ、後は神のもとに召されるのを待つばかりと思っていたアブラハムに、「ひとり子イサクをささげなさい」という大きな試練が与えられました。

## 一、信仰を受け継がせるために

アブラハムはイサクの将来のために、できるだけ準備をしました。女奴隷ハガルによって生まれたイシマエルを遠ざけ、近くを治めていた王アビメレクとは、子孫にわたる和平を結びました。ベエル・シバの井戸も確保しました。しかし、最も大事なことを受け継がなければなりませんでした。それは、主への信仰です。

もちろん、日々の生活の中で、アブラハムはイサクに、主を礼拝することや祈ることは教えていたからこそ、イサクも素直に父の言葉に従っています。

アブラハムは、「イサクをささげよ」との声に、恐らく心の中では、「主よ、どうしてですか」と苦しみ叫んだことと思います。しかし、その思いを口にせず、翌朝早く、示されたとおりの行動をとっていきます。

これまで、時には過ちもあつたアブラハムでしたが、これまで主の言葉に聞き従ってきた生涯そのものを、ここで凝縮して、息子イサクに見せていきました。

もし、主の言葉どおりにしたら息子は死んでしまうからと、従わなかったら、手元にイサクは残りますが、受け継がせるべき信仰と主の祝福は失われていました。

## 二、主の与えるテスト

もし私がアブラハムの立場だったら、こんな主の言葉に従えるだろうかと不安になります。でも大事なことは、刃物を持つアブラハムの手を止められた主が、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った、そしてあなたがわたしの言葉に従ったからであるとおっしゃられたことです。つまり「わたしのために惜しまない」かどうか、(神はアブラハムを試みられたのです)。

誰もがアブラハムと同じ経験をするのではなく、主は

8月

28日

聖書講解

一人一人それぞれに、信仰を鍛え強めるための試練をお与えになります。どんなことが起こるかは皆違います。が、どうすればこの試練を乗り越えられるかは同じです。「御子のみならず万物をも」(ローマ8・32) 惜しまずに私たちに与えられるほどに愛してやまない神が、最善以外のことをなさらないことを信じて、み言葉に聞き従うことです。

私たちが試されるとき、主もまた、私たちへの選びにおいて、また導きと守りにおいて、試されています。そして主は、私たちに「あなたなら必ず乗り越えることができる。そのために私はあなたのそばにずっといて、あなたを見守り、助ける」と励まし続けておられるのです。

### 三、先取りの信仰

アブラハムは、イサクに代わる献げ物として雄羊を見つけましたが、そのためには「目をあげて見る」(新共同訳「目を凝らして見回した」) ことが必要でした。私たちが主の助けを見出し、試練を乗り越える道を探すとき、主の前に心を尽くして祈り求めなければならないからです。イサクを献げた場所を、アブラハムは「アドナイ・エ

レ」(主は備えてくださる) と名づけました。しかし、振り返ってみると、アブラハムは先に、「神みずから燔祭はんさいの小羊を備えてくださる」と言い表しています。

アブラハムの信仰は、事が解決してからではなく、試練を目の前にしていだくものです。主は今の困難な状況も、私の不安な心も一切を見ておられるという信頼であり、まだ自分には見えていなくても、解決は主にあるという信仰です。

神は、アブラハムの手を止められたのに、全人類の罪を赦し救うために、ひとり子イエス・キリストが十字架につけられた時には、これを止めませんでした。私たちは、この大きな愛と犠牲の中に生かされています。み言葉に聞き従うのは、主の愛への心からの応答です。

### 結論

ひとり子を与えてくださった神の愛、十字架に命を捨ててくださったキリストの愛にこたえ、何にもまさって神を愛する者となりましょう。

## 研究資料

(宮澤清志)

## テキスト

**1 これらの事の後** 直接には前章32〜34節のことを指すと考えられるが、より広く考えれば、イサクの誕生から始まって、現在に至るまでのこれまでの歩みのすべてを指すものと考えられる。

**試みて** 新改訳では「試練」。神が信仰者を試練にあわせられるのは、時として、信仰者が神から離れ、迷いだしている時である。しかし、この「試み」を通して、神は信仰者の信仰と献身をさらに深いものとしようとされたのである。なぜなら、アブラハムは神の呼びかけに對して即座に「ここにおります」と答えることができたからである。

**2 あなたの愛する** いよいよ愛するようになった、の意。本文中の「ひとり子」という記述とともに、神はアブラハムがイサクをどんなに愛しているかを知っておられた。その上で、神はアブラハムに、イサクをささげるようにと命じられたのである。**わたしが示す山** はんさい モリヤの地。この地でダビデ王は罪のために燔祭と酬恩祭をささげ(歴代上21・26〜28)、その子ソロモンはこの山で主の宮の建設に取りかかった(歴代下3・1)。やがて主イエスはこ

の山で十字架にかかられた。この地はまさに神の選びの地なのである。**燔祭** 全焼のいけにえ(新改訳ほか)。燔祭とするためには、人は、まずそのいけにえを殺さなければならぬ。その後それを全部ささげ、祭壇の上で焼いて煙にするのである。

**5 あなたがたの所に帰ってきます** このアブラハムの信仰はどこから来ているのか。イサクまでもが「帰ってくる」としているのは、イサクが死なないということではないであろう。そうではなく、アブラハムが「神が死人の中から人をよみがえらせる力がある、と信じていた」(ヘブル11・19)信仰であり、「イサクに生れる者が、あなたの子孫と唱えられる」(創世記21・12)という神からの約束を信じる信仰に裏打ちされた確信であった。

**6 その子イサクに負わせ** イサクが自らの死のためのたきぎを背負って歩く姿は、主イエスの十字架への道を彷彿とさせる(ヨハネ19・17)。特に、**ふたり一緒に** という表現とも相まって、父なる神とひとり子イエス・キリストという関係の予表ともなっている。

**8 備えてくださる** (ヘ)イルエ このアブラハムの言葉は、前節のイサクの質問に対する単なる言い逃れではない。あるいはアブラハムが雄羊を予期していたのでもない。

イサクをささげることについてのアブラハムの信仰の告白であると同時に、自らの内心の表現であったのであろう。14節にあるように、この言葉は後にアブラハムの信仰のモットーとなり、この後多くの人々は、この言葉によって支えられているのである。ちなみに「備える」とは、英語訳では「provide」「前もって見る」であり、この言葉から「providence」「摂理」という言葉が生まれた。

9〜10 このときにアブラハムに試みられた主は、同時にイサクにも試みられている。この時すでに青年期に達していたイサクも、合意の上で縛られたはずだからである。

11 原語では、冒頭に(ヘ)ワウ」という接続詞がある。口語訳では前節のおわりに「くした時」と訳しているが、いくつかの日本語訳では「そのとき」と訳している。非常に重要な言葉である。

アブラハムよ、アブラハムよ 神は、アブラハムを二度繰り返し呼ばれる(1節は一回)。神は、しばしば自身の重要な介入のときには二度繰り返し呼ばれることがある。たとえばモーセ(出エジプト3・4)、サウロ(使徒行伝9・4)など。

はい、ここにいます 自らのひとり子イサクを殺そうとしたであろうその時でさえ、アブラハムは神の呼びかけ

に冷静に答えている。尋常ならざる状況の中にあっても、神の語りかけに対して従順に応答する信仰者でありたい。

13 ここに神が意図しておられたいけにえがあった。神の備えはすでに準備され、待っていたのである。このいけにえは、少なくとも犠牲となる者の代わりであったことは覚えておくべきである。

14 8節参照。この節では場所の名であると同時に神ご自身の名ともなっている。今日でも この場所の名はモーセの時代にも言い伝えられていた。

16 自分をさして 神は、ご自分にまさるものがないゆえ、ご自分をさして誓われたのである(ヘブル6・13)。旧約聖書における神の誓いは、まず神の御計画の不変性を表すしるしとして(詩篇110・4)、また神の誓いによって、信仰者たちが力強い励ましを受けるためになされるものである。

17 18 祝福の宣言。その祝福の内容は、あなたの子孫を増やすこと(17)と、地のすべての国民が祝福を得るための管となるという約束であった。ただ、アブラハムが神から祝福をいただいたのは、よき従順な業のゆえではなく、あくまでも神の恩寵によることに注意したい。

同時に神はアブラハムの信仰にも答えられたのである。

参考図書 9／4の参考図書に同じ

## 聖書

創世記22・1〜19

## タイトル

愛のテスト

## 暗唱聖句

あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを…ささげなさい。創世記22・2

## 目標

何にもまさって神を愛する者となる。

## 導入

(水野晶子)

ふーちゃんは知らない町に転校して、友だちがいないのでさびしくて、お母さんに犬を飼ってほしいとお願いました。ペットショップに行つて探しました。「犬の世話は、必ず自分でするから」と、約束もしました。何よりも一生懸命祈りました。ついにある日、お父さんが犬を買ってきてくれたのです。この日からこの犬は、ふーちゃんの宝物です。だれにもあげたくない宝物です。

アブラハムは百歳の時、二十五年待つて約束の子イサクが与えられました。アブラハムにとつて、イサクはかけがえない大切な宝物でした。

## 信仰のバトンタッチ

アブラハムはイサクに、神様を礼拝することや祈ること、生きるために大切なことを一つ一つ教えました。イサク

は素直にお父さんの言われることに従い、成長していききました。神様は何よりも、イサクがお父さんから神様への信仰を受け継いでほしいと願っていました。この信仰のバトンを受け取るために、神様はアブラハムとイサクを試されました。

## 愛のテスト

ある晩、神様はアブラハムをお呼びになりました。

「アブラハムよ、あなたの大切な息子のイサクを連れて、モリヤというところに行きなさい。山に登りイサクをいけにえとしてささげなさい」と命じられました。アブラハムにとつてこの命令は、どんなにつらく苦しいものだったでしょう。けれども夜が明けると、アブラハムはイサクと召使の若者を連れてモリヤに向かいました。

三日目にモリヤの山のふもとに着き、ロバと若者をそこに置いて、「礼拝が終わったら必ず一緒に帰ってくる」と伝え、アブラハムとイサクはたきぎと火と刀を持って礼拝のために登っていききました。イサクは何も知りません。「お父さん、ささげものにする羊はどこですか？」と聞くと、「神様が必ず用意してくださるよ」と答えました。アブラハムはどこまでも神様を信じていました。やがて、

8月

## 28日 礼拝メッセージ例

示された場所に着き、祭壇を築きました。たぎぎを並べて、アブラハムは宝物のイサクを縛り、祭壇の上に置きました。アブラハムは、神様は必ず、イサクをよみがえらせてくださると信じていました。イサクもお父さんを信頼していました。ついに、刀を振りあげ、イサクめがけて振り下ろそうとしたその時、「アブラハムよ、待て、刀を下ろすな。あなたが神を心から敬っていることがよくわかった。大切なひとり子さえ、ささげようとしたのだから」と声が聞こえました。アブラハムが目を上げてみると、角をやぶに引っかけている雄羊がいて、それをイサクの代わりに神様にささげて礼拝し、アブラハムが信じたとおり、一緒に帰って行くことができました。

## 例話

雪国で、伝道していた牧師夫婦に一人息子がいました。来る年も来る年も、伝道しても人が来ません。教会の人は、文句ばかり言って協力してくれません。それでも、クリスマスには新しい人々を迎えようと、二人で一生懸

命準備して夜中までかかってしまいました。外は雪が降って、寒い晩です。牧師館で寝ていた三歳の息子は、夜中に目を覚まし、両親のいないことに気がついて、教会まで歩いて行きました。夢中で準備している父母は、息子が外にいることに気が付きません。ようやく帰ろうとした時、雪に埋もれている息子を見て、死にそうな息子を抱きかかえ、温めながら、もう牧師をやめようと思いました。もう沢山だと思いました。その時、神様の語りかけを聞いたのです。「自分の息子が苦しむことは悲しいだろう。わたしは、おまえのためにひとり子を十字架につけた。お前を愛しているから」と。じかに神の愛を知らされて、この牧師の心は変えられました。やがて、この息子も牧師となり、神を愛し燃えて伝道しています。

私たちのために、ひとり子さえも与えてくださった神の愛、十字架に命を捨ててくださったキリストの愛に应えて、神様を愛していきましょう。

♪今こそ、キリストの愛に应えて♪

(福岡教会 田中英昭兄作詞作曲)





## 聖書 創世記24・42〜58

## テーマ 信仰による決断

## 序論

(福井文彦)

アブラハムが息子イサクの結婚のために、花嫁をさがすというただ一つのこと、詳細に語られています。それは神がアブラハムになされた約束の確かさと、その実現に至る過程で、神が時々刻々導いてくださっていることを悟るため、また、信頼して従う決断を教えるためです。

## 一、忠実なしもべ

アブラハムは神に従い、神はその生涯を祝福されました。しかし「年が進んで老人と」(1)なり、息子イサクの結婚のことを考えなければなくなってきました。そこでアブラハムは長年忠実に仕えてきたしもべに、イサクの嫁選びの大役を命じました。彼は所有のすべてを管理する最古参の家令で、もしかしたらエリエゼルかもしれません(15・2)。彼は実務に忠実であつただけでなく、信仰においても忠実で、このような大事なことをゆだねることができるしもべでした。

アブラハムがこの忠実な家令に与えた嫁選びの条件は、

二つありました。

①カナン人の中から選んではいけないこと(3)。アブラハムの故郷に行き、親族の中から選ぶことでした(4)。つまり、神を信じる者の中から選ばなければならぬということです(リベカの家族が神を信じていた証拠は、31、50節など参照)。

②約束の地カナンへ連れて来ること。つまり、イサクをカナン以外の地へ連れて行つてはならないということです(6)。それは信仰の立場を捨ててはいけないということです。

## 二、信仰の決断

アブラハムのしもべは、彼に託された命令に従い、長い旅の後、目的地ナホルの町の外にある井戸のところに着きました(10)。そこでまず、「神がイサクのために定めておられる娘にきょう会わせてください。その娘のしるしとして、未知の旅人に一杯の冷たい水を飲ませてくれる人、そればかりか、らくだにも水を飲ませてくれる人を導いてください」と祈つたのです(12〜14)。

しもべが祈り終わらないうちに、神はみこころの娘リベカをこの井戸近くに導いておられました。そこで、し

9月

## 4日 聖書講解

もべは早速リベカに近寄り、水を飲ませて欲しいと申し出ました。すると彼女は「わが主よ、お飲みください」(18)と言ひ、その上、らくだにも水を飲ませたのです(19、20)。しもべはこの一部始終を見ていて、この人こそ祈りの答えとして与えられた人であると知ったのです。そこでもべはリベカの家の客になりたいと申し出ると、リベカは二つ返事でこれを快く受け入れてくれました。しもべはリベカの家に招き入れられ、まず用件を話しました(34、49)。すると、リベカの兄ラバンも父ベトエルも「この事は主から出たことですから、わたしどもはあなたによしあしを言うことができません」と答えたのです。彼らはリベカの結婚は神の導きであると認め、人間的な思いや人情を離れて信仰の決断をしたのです。

### 三、信仰の従順

しもべはたずさえてきた金銀の飾りと衣服をリベカに与え、兄と母にも高価な贈り物をしました。それからもてなしを受け、その晩、しもべは従者と一緒に泊まりました。しかし、彼は主人アブラハムからゆだねられた大役がすむと、すぐに帰ろうとします。するとリベカの兄と母とが彼を引きとめようとしたのです。しかし、しもべ

は「主はわたしの道にさいわいを与えられましたから、わたしを引きとめずに、主人のもとに帰らせてください」と、すぐに帰る決心を変えなかったのです。

そこで、兄と母は娘を呼んで、「あなたはこの人と一緒にいきますか」と決心を聞くと、リベカは、言下に「行きます」と答えたのです。彼女の決断は信仰による決断です。リベカが嫁ごうとしている所は、長年住み慣れた家庭と故郷を離れた遠い未知の国でした。親しい人はもちろんのこと、知っている人は一人もない所です。また肉親が長い別離を惜しんで、せめて十日間一緒に過ごしたいと願ったのです。そのような家族の人情をも後にして、なおリベカの決断を動かしたものは、リベカの信仰でした。信仰と従順は表裏一体です。リベカの信仰の決断は信仰の従順でもありました。

### 結論

神の導きを悟り、信頼して信仰の決断をし、従ったリベカとその家族をおして、アブラハムに約束された祝福が実現するのです。神の導きを悟り、信頼し、信仰の決断と従順の生涯を送り、主の真の祝福にあずかりましよう。

## 研究資料

(宮澤清志)

「アブラハムには、なさなければならない最後の義務がもう一つあった。すなわち、約束の相続人であるむすこイサクのために、妻を見つけることである。これはいちばん重要な仕事である。なぜならば、イサクの妻を通して、アブラハムに与えられた神の祝福が未来の子孫に伝えられていくのだからである。ふさわしい妻が、イサクのために見つけれられるということは、そのために大切なのである。この妻探し、創世記の中で最も長い本章の主題である。それはすべての族長物語の中で、もつとも美しい物語の一つであり、単純かつ明快な文体によって記録されており、そして、旧約聖書に見られる古代東方の生活の、もつとも生き生きとした描写の一つを提供している」(フリッチ)。

本日の聖書箇所を取り扱うに当たっては、まず24章全体に目を通す必要がある。神はイサクのために、最後までアブラハムに信仰を求め続けた。本章の前半部分は、最後までその信仰が試されたアブラハムを中心として描かれている。そのアブラハムの信仰を受け継いだイサクの物語と、イサクの背後に働かれた神の御手の物語が、後半のストー

リーである。

## テキスト

**42** 5 **49** この箇所は、本章11〜27節の出来事の、しもべの証である。このしもべの証を通して、まず、彼が事実を曲げることなく出来事のままを率直に、そして無駄なく証したことに気づかされる。同時にこの証には「わたし」のしたことではなく、「主」のなされた出来事が証されている。証とは、わたしの上に働かれた「主」の出来事の証言である。このことから、しもべは一連の出来事を通して「主」に栄光を帰したのである。

**わたし** この章の他の節には「しもべ」として登場する。一説には、このしもべは15章2節の「エリエゼル」とされているが、確証はない。

**49** **いつくしみと、まこと** 27節では、神がアブラハムにいつくしみとまことを示されたという表現であるのに対して、この節ではラバンがアブラハムに「いつくしみとまこと」を示すようにと語られている。ここまで導かれたのは神であり、その神の御計画を人間が変えることはできないというしもべの思いが伝わる言葉である。 **右か左に決めましょう** 直訳に近い言葉。ほかの家族の中にイサクの妻

を見つける、あるいは別の花嫁を見つけるという意味ではなく、どうすべきかを決める、というような意味である。

**50 ラバンとベトエル** リベカの兄ラバンの名前が先に来ていること、あるいは父であるベトエルの名が他に登場しないことから、父ベトエルの名は既に亡くなっている（この場合、父ベトエルの名は後代の挿入であるとする）か、もしくは高齢のゆえに家の実権は兄であるラバンが握っていたのであろう。**この事は主から出たことですから、わたしどもはあなたによしあしを言うことができません** しもべ

は、37節から48節において、起こったことが主の意志であつて、語られた誓いと約束と摂理は神の召しであるということを強く印象付けた。その結果、彼らはその神の摂理に感服しつつ、まったく何も言うことができなかった。

**52** 前節までのラバンとベトエルの応答を聞いて、しもべはまず主に感謝の礼拝をささげた。

**53** このしもべがリベカ一家に与えた品々は、今風にいえば「結納」であろうか。この出来事をまず主に感謝したしもべは、続いてその感謝の気持ちをしりべかとその家族に表した。それはこの結婚の取り決めに拘束力を与えるものでもあつた。

**54** 本章に見るこのしもべの行動の特徴は、行動に全く

無駄がないということであろう。アブラハムに託された彼の任務は完了したので、彼はただちにアブラハムのもとへ帰ろうとしたのである。

**55** このラバンとその母の言葉は、リベカとの別離を惜しむ気持と、客に少しでも長くいてもらって接待するというオリエントの習慣からくるものであつて、理解できる。

**56** しもべが10日ほどの猶予さえも待てなかった理由は、待っている主人アブラハムの高齢のゆえであらう（1）。

**57** リベカの兄と母がリベカにこのように尋ねたのは、彼らがリベカの意見を尊重しようとしたためであるのか、あるいは彼らがリベカはすぐに出発するのを拒むと考えたからなのか、真意は明確ではない。しかし、最終的に彼らは60節で、すぐに出発したリベカを祝福をもって送り出していることは、取り上げるべき事柄である。

**58** このリベカの言葉は、リベカなりの「主の御心に従う」ことの応答であらう。まさに「見ずして信じる信仰」（ヨハネ20・29）の一つの型をここにみることができる。

**参考図書** デレク・キドナー『ティンデル聖書注解 創世記』、小畑進『創世記講録』（以上のちのことば社）、フリッチ『聖書講解全書2 創世記』（日本基督教団出版局）他

## 聖書

創世記24・42〜58

## タイトル

全能の神に導かれて（ラリー・デー）

## 暗唱聖句

この事は主から出たことですから、わたしどもはあなたによしあしを言うことができません。 創世記24・50

## 目標

主の導きを悟り、信頼して、決断する者となる。

## 導入

（松浦みち子）

教会では9月の第1聖日を振起日（ラリー・デー）と呼んでいます。長い夏休みも終り、もう一度信仰を奮い起こして、新しい気持ちでスタートをきる日です。背筋をのばして礼拝しましょう。

今年の3月11日、未曾有の大地震、津波、原発の放射能汚染という大災害が東日本を襲いました。家族を失った子どもたち、友だちと離れ離れになった子どもたち、命を失った子どもたち、たくさんいます。それらの子どもたちを忘れないで、私たちは、今日生かされていることを感謝し、元氣よく二学期を過ごしましょう。

## アブラハムの最後の願い

アブラハムの生涯を1か月間学んできましたね。アブラハムが、神様から素晴らしい約束を与えられ、さまざま試練を通して、忍耐すること、信頼すること、神様を第一にすることを学んできました。そして、豊かな祝福をいただきました。年月がたち、妻のサラは亡くなり、もうアブラハムは百四十才になりました。「神様は、わたしの子孫を星の数のように増やすと約束してくださいましたが、息子イサクにはまだお嫁さんがいない。そうじゃ、イサクにお嫁さんを迎えてやろう」。そこでアブラハムは、一番信頼している召使に命じました。「息子イサクのために、お嫁さんを探してきておくれ。わたしの生まれ故郷に帰って、神様を信じる女の人を連れて帰って来ておくれ」、「はい、わかりました。行つてまいります」、召使は十頭のらくだにお土産をいっぱい積んで出かけました。

## 召使の祈り

ご主人のアブラハムから大変な役目を命じられた召使は、何日もかかってアラム・ナハライム地方のナホルの町に着きました。井戸のほとりに来たとき、まず神様に祈りました。「どうか神様、イサクさんのためによりお嫁さんを与えてください。わたしが娘さんに会ったとき、すぐ

9月

## 4日 礼拝メッセージ例

に、その人だとわかるように、わたしとらくだに水を飲ませてくれる人に出会わせてください」と。召使はアブラハムの信じている神様は、イサクにふさわしい娘さんです。でに備えてくださっていると信じ、教えて下さいと祈ったのです。召使が祈っているうちに、一人の若い娘が水がめを肩にのせてやってきました。彼女が泉に降りて水がめに水を満たして、上がってきた時、召使は走りよって言いました。「お願いです。あなたの水がめの水を少し飲ませて下さい」。「はい、どうぞ」、娘は、ニッコリしながら親切に水を飲ませてくれました。それから「らくだにも飲ませてあげましょう」と言って、十頭のらくだが残らず飲み終えるまで何回も泉に降りては水をくんでくれたのです。なんて優しい働き者の娘さんでしょう。その働きぶりを見ていた召使は「あなたはどなたの娘さんですか?」と尋ねると、名前はリベカ、アブラハムの親戚の娘であることがわかりました。「この人こそ神様が備えられた人だ」と思い、神をほめたたえ感謝をささげました。召使はリベカの家にいき、アブラハムのこと、イサクのこと、そして神様が祈りに答えてリベカに出会わせて下さったことなどを話しました。リベカの父も兄も「この事は主からでたことだす

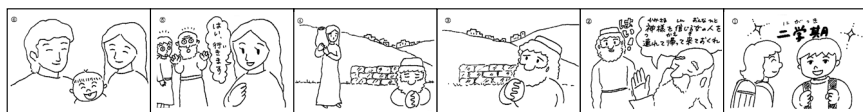
から、わたしどもはあなたに善し悪しを言うことができます」と言って、喜んで結婚を許してくれました。

## イサクとリベカの結婚

あくる朝、召使は「早く、リベカさんを連れて帰りたい」と願い出ました。リベカに聞くと「はい、行きます」ときっぱり答えました。リベカにとつて住み慣れた地を離れ、見たこともない人と結婚するのですから不安もあつたでしょう。しかし「この結婚は、神様の決めてくださったことだから、神様を信じて従って行こう」と決心したのでした。神様はその信仰の決断を祝してくださいました。やがて、イサク夫妻に子どもが与えられ、アブラハムの信仰は、息子イサクへ、またその孫へと受け継がれていきました。

私たちの人生には、これから先どんなことがあるかわかりませんね。でも神様は私たちの人生に御計画を持っていらつしやいます。そして、私たちにとつて一番良いことをご存じです。神様のみこころがわかるように、いつも神様にお祈りをして教えていただきますしょう。

♪ 祈ってごらんよわかるから ♪ (新聖歌 481)



## 聖書 創世記26・12～22

## テーマ 信仰による柔和

## 序論

(福井文彦)

神は飢饉ききんの時に、イサクに対してエジプトへ行くなと命じられ、従ったイサクを祝福されました。ところが寄留者イサクがあまりに繁栄するので、土地のペリシテ人の妬みねたみを買い、彼らはアブラハムが掘った井戸をふさぎ、迫害します。その後にも移ったゲラルの谷で同じようなことが起こります。そこでイサクは信仰の柔和をもつてさらに移ります。神はそのイサクを祝福されたのです。

## 一、主の祝福と試練

飢饉があつたにもかかわらず、イサクがその地（ゲラルのアビメレク王の地）に種をまくと、その年百倍の収穫を得ました。このような収穫は考えられないことであり、まさにこれは主の特別な祝福でした。これはリベカのことでの失敗をイサクが悔い改めた証拠であり、主の恵みでした。

このようにしてイサクは豊かになり、ますます富み栄えました。富は時として人々の妬みを招くことがあります。

す。この場合もそうでした。ペリシテ人たちはイサクの富み栄えるのを見て、妬みしました。彼らはイサクからその理由を聞いて、その信仰に倣ならうのではなく、妬んで迫害したのです。

そこで彼らは、イサクの父アブラハムがしもべらに掘らせた井戸をふさいでしまいました。この当時、井戸を掘るといふことはなかなか大変ことであり、この井戸を中心に生活が営まれていたのです。井戸の水を人が飲むだけでなく、家畜も飲みますから、井戸をふさぐという事は、大きな迫害でした。ペリシテ人たちは、この井戸をふさぎ、その土地から去らせ、イサクに与えられた祝福をとどめようとしたのです。

## 二、イサクの柔和

その土地の人々は、先代の王がアブラハムとの間に立てた契約（21・22～30）を無視したのです。そしてイサクにその土地を去るように要求しました（16）。彼は争いを好まぬ人ですから、一言も抗弁せず、すぐそこを去り、ゲラルの谷へと移りました。

そこでイサクはアブラハムの時代に掘られ、その後ペリシテ人がふさいだ井戸を新たに掘り直したのです。とこ

ろが、ゲラルの羊飼たちが「この水はわれわれのものだ」と主張すると、イサクはまたそこを去りました。

そこでもまた井戸を掘りました。ところがそれについても争いが起こり(21)、イサクはそこからも移ってほかの井戸を掘ったのです。彼は次々に譲歩して、決して争うことはしませんでした。

井戸を掘ることが容易なことではなかった当時、イサクは争いを好まず、ほかの人に譲歩できる人でした。このようにイサクは、確かに信仰による柔和な人でありました。

### 三、信仰による柔和

主イエスは山上の説教で、「柔和な人たちは、さいわいである。彼らは地を受けつぐであろう」(マタイ5・5)と教えられました。

国語辞典では、「柔和」を「やさしく、おだやかなさま」とげとげしい所のない、ものやわらかな態度・様子」と説明しています。では、イエスが言われた「柔和」とはどのような意味でしょうか。

①神に対して謙虚であることです。神の摂理に対して恨みませんし、不平を言いません。また反抗することな

く、自暴自棄にならず、失望しません。神の摂理に対して静かに耐え忍ぶのです。

②いつも神のみこころに対して従順に従います。ヨセフは兄たちに売られてエジプトに行つて苦勞し、言うことのできないようなくやしさに胸がつぶれるような環境の中をとおりましたが、一言も不平を言いませんでした。

③柔和は御霊の実の一つです(ガラテヤ5・23)。柔和な人は、他人に対してなごやかな優しい態度が現われます。優しいことばで語り、不当な取り扱いを受けても、耐え忍んで喜んで、受け入れます。他人に寛容、温和で、自分を誇大評価しませんし、自己主張もしません。尊敬され、敬われることも期待しません。

イエスはご自身の柔和にふられましたし(マタイ11・29)、主の柔和のクライマックスは、十字架の上で表されました(1ペテロ2・22・23)。

### 結論

イサクが神に祝福されたのは信仰による柔和によるのです。私たちも最も柔和であられた主イエスを仰いで、柔和を学び、神に聞き従い、聖霊に満たされ、神の祝福にあずかりましょう。



## 研究資料

(宮澤清志)

今週与えられている聖書の箇所を理解するには、それまでの背景をも同時に理解する必要がある。イサクも、アブラハムと同じ契約を受け継ぐためには、やはり父アブラハムと同じように訓練され、訓練を通される必要があった。当時、飢饉きんのときにはエジプトに下るのがごく自然のことであつたし、現にアブラハムもそのようにした(1、12・10)。しかし、アブラハムのときとは異なり、主は「エジプトへ下つてはならない」(2)と仰せられたのである。主の解決方法は、人物や時代により異なる。人間的にはどんなに安全で確かな方法と見えたとしても、神の御心のみが唯一の祝福への道である。だから、ここでも「主が最善を備えてくださる」という信仰が試されているのである。その結果、イサクは「この地にとどまる」(3)ようにという主の命に従つて、ゲラルの地に留まる決心をする。

しかし、そこでやはり父アブラハムと同じあやまちを犯すのである(8・11、12・10)。このことは、父アブラハムの弱さがその子イサクにも臨んだことを示している。

それは、罪の性質がその子に伝わることを示すと同時に家庭環境の大切さをも示す実例でもある。しかし同時にこのような失敗を通して、自らの弱さと主のご介入を学ぶことは意味のあることである。

そこで、本日の聖書に入る。

## テキスト

12 エジプトへ下るな、という神の命令(2)に従つた結果、イサクは神が約束された祝福(3)に与あたふことになる。当時、イサクの身の上に起こつた飢饉(1)がどの程度のものかわからないが、その飢饉の結果、イサクは「地に種をまく」という行動に出たのであろう。その地ゲラル(1、6)。得た(ハ)マーツァー 新改訳聖書では「見た」とある。この言葉は、種をまいてから世話をして収穫をする、という現代の農業のあり方ではなく、種をまいたらあとは収穫の時に行つてその収穫を見るところ程度の農業のあり方を指している。百倍の収穫 豊作の年の妥当な収穫量であつたといわれている(マルコ4・8参照)。しかし、この祝福は、「主が彼を祝福された」とあるように、明らかに神の恵みによるものである。

14 羊の群れ、牛の群れ及び多くのしもべ 12節の収穫以上に、この言葉はイサクの真の職業が牧畜中心であったことを示している。羊や牛の群れが増えた結果、多くのしもべを雇う必要が生じたのであろう。

15 この節以降、「井戸」が中心的な役割を担っている。驚くほどの穀物を得(13)、多くの羊や牛の群れを養い(14)、そして多くのしもべとともに生活したイサクにとって、水は生命の源であつたに違いない。井戸はすなわちその生命の源としての役割を果たしていたのであろう。父のしもべたちが掘ったすべての井戸 アブラハムの掘った井戸については、すでにその当時のアビメレクとの間に正式に合意ができている(21・27、30〜31参照)。

16 イサクの祝福と、その祝福へのペリシテ人のねたみの結末は、ついにはイサク追放という事態にまで発展する。あなたはわれわれよりもはるかに強くなられたから ペリシテ人にとって、イサクは脅威に映つたのであろう。

18 アビメレクにより追い出されたイサクは、ゲラルの谷に移住した。そこで アブラハムの時に 掘って埋められた父の井戸を再び掘ったのである。それは、イサクは多くの家畜の群れを所有しており(14)、その家畜を養

うためには多くの飲料水が必要としたからであろう。またこの井戸がアブラハムの井戸であるがゆえに、自らが使用する正当性もあると考えたようである。

20 エセク 「争い」「論争」という意味。しかし、直接的にはイサクではなく、イサクの羊飼いたちとゲラルの羊飼いたちとの間の争いであつた。

21 シテナ 「敵対」「敵意」など。20節での命名では、どちらかといえば目に見える形での「争い」であつたのに対して、今回の命名では、そのような目に見える争いの背後にある感情、あるいはその争いの根底にある部分が命名の対象となつていふと考えられる。

22 レホボテ 「自由の地」「広々とした地」「場所」「余地」という意。どこにいつても不和と衝突とを繰り返してきたイサクにとって、衝突から解放され、広々とした地に到着できたことは、神の恵み以外の何ものでもなかった。旧約における救いの概念のひとつは「囲みを解かれる」ということである。この経験はイサクにとつても救いとなつたに違いない。

参考図書 デレク・ギドナー『ティンデル聖書注解 創世記』、小畑進『創世記講録』(以上のちのことば社)他

## 聖書

創世記26・12〜22

## タイトル

柔和な人イサク

## 暗唱聖句

柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう。

マタイ5・5

## 目

不必要な争いを避け、柔和に生きる者となる。

## 導入

(松浦みち子)

アブラハムの息子イサクさんはどんな人で、どんな生涯を歩んだのでしょうか。実は、イサクさんもさまざまな試練の中を通りながら神様と共に人生を歩んでいきました。平坦な人生はありませんね。いろいろのできごとに出会うのは、生きている証拠です。「川の流れのように」という歌の歌詞に、「知らず知らず、歩いて来た、細く長いこの道、振り返れば、はるか遠くふるさとが見える、でこぼこ道やまがりくねった道、地図さえない、それもまた人生」とあります。

## 立ち退きをせまられるイサク

父アブラハムの跡を受け継いだイサクは、父と同じような試練にありました。飢饉きんが起こったのです。そこで

イサクはゲラルのペリシテ人の王アビメレクのところに逃れていきました。この王は、イサクたちに住むことをゆるしてくれました。そこでさつそくイサクは種をまきました。するとどうでしょう。その年の内に、百倍の収穫を得ました。また、羊の群れ、牛の群れ、多くのしもべを持つようになると、イサクは非常に裕福になりました。神様が祝福してくださったのですね。

ところが、イサクが裕福になったのをねたんだ周りのペリシテ人たちが意地悪をするようになり、アブラハムのしもべたちが掘ったすべての井戸をふさいで、土で埋めてしまいました。井戸は畑のためにも羊や牛のためにも必要な水の源です。しかも、好意的だったアビメレク王も「われわれの所を去ってください」と立ち退きを迫ってきたのです。さあ、困ったことになりました。イサクはどうしたでしょう。ペリシテ人と争ったでしょうか。いいえ、イサクは争うことなく、その地を去って行きました。

## 柔和な人イサク

イサクたちは、人里はなれた谷に天幕を張ってそこに住みました。そして、以前父アブラハムが掘って、壊されてしまっていた井戸を再び掘り起こしました。「やつ

9月

## 11日 礼拝メッセージ例

たあー、水だよ！」と喜ぶのもつかの間、ゲラルの羊飼いたちがやってきて、「この水はわれわれのものだ」と争って奪ってしまいました。イサクはこの井戸をエセク（言い争い）と名付けました。イサクはあきらめることなくまた一つの井戸を掘りました。すると、また羊飼いたちがやってきて、争って奪ってしまいました。イサクはその井戸にシテナ（言いがかり）と名付けました。それで、イサクはそこから移ってまた一つの井戸を掘りました。今度は羊飼いたちは奪っていきませんでした。そこでこの井戸をレホボテ（広々とした所）と名付けました。イサクは決して争いませんでした。隣人との平和を求めて、自分はいつも身を引いていきました。いくじなしのように見えるかもしれませんが、イサクはどんな時も神様が共にいてくださることを信じませんでした。「柔和な人たちは、幸いである、彼らは地を受けつぐであろう」（マタイ5:5）のように、かつて、迫害をしたアビメレク王がやってきて、平和条約を結ぶこととなりました。主に信頼する者を主は祝し、勝利を与えて下さるのですね。

ちよつと考えてみよう！

東京上野の西郷さんと鎌倉の大仏様がけんかをしました。

どちらが勝ったでしょう。わかりますか？ 西郷さんは銅像ですね。大仏は仏像ですね。大仏が「ぶつぞー」と言ったら西郷さんは「どうぞー」と答えます。だから大仏の勝ちです。

でも、今日のお話を聞いて、ちよつとまっつて！ と思いませんか。私たちは人にぶたれたり、意地悪されたら悔しくなつて、もつと仕返ししたくなります。ぶつたほうが強く、ぶたれたほうが弱いという考えです。しかし、聖書は、その考えは違ふよ、と教えてくれます。今日のイサクさんは、ぶたれつぱなしでした。ぶたれても、意地悪されても、がまんして許してあげる人のほうが何倍も強い人です。悪魔は「仕返しをする心」を植えて、世界中を憎しみと争いの世にしようにと働いています。私たちはそんな、悪魔に負けることなく、意地悪する人に優しくし、ぶたれても仕返しをしないで本当の勝利を勝ち取りましょう。神様を信じて一生懸命お祈りしてごらん下さい。必ず悪魔に勝つ力を神様はくださいます。柔和な人となつて、暗い世を輝かす光の子になりましょう。

♪ ひかりひかり♪（福音子どもさんびか 83）



## 聖書 マルコ7・14～23

## テーマ 人を汚す罪

## 序論

(山田和幸)

イエスはパリサイ人、律法学者と何度も論争されました。彼らが自分たちの言い伝えに固執して、律法の本質を見失っていることがたくさんあったからです。

ここでは、食事の前に念入りに手を洗わない弟子たちのことが非難され、それに答える中で、何が人を汚すかが語られています。

## 一、人の外から入るもの

イエスは、「外から人の中にはいつて、人をけがしうるものはない」と教えられました。「どんな食物でもきよいものとされた」のです。この教えは、ユダヤ人にとっては驚きでした。ユダヤ人は汚れた食物を食べれば、そこから汚れが入ってくるかと考えていました。旧約聖書には、きよい食物と汚れた食物との区別が書かれていたからです。

日本にも、「朱に交われれば赤くなる」という考え方があ

ります。多くの人は、罪や汚れ、悪や過ちの原因を、その人の外側に見つけようとします。

また、人は目に見える外側のことにとらわれて、その背後にある本質や、心の問題を見失いやすいものです。イエスはここで、心の内にこそ問題があることを示しておられるのです。

## 二、人から出てくるもの

イエスは、「人の心の中から、悪い思いが出てくる」と明言されました。人の心の内にある罪の問題を示されたのです。ここであげられている中では、「貪欲」(欺き)<sup>ねた</sup>「妬み」(高慢)などの隣人に対する良くない思いが、心の中の問題であるのは、よくわかります。そして、「不品行」(姦淫)「好色」とあるような男女関係の不道德も、心がきよければ起きてきません。さらに、「盗み、殺人」とあるような、重大犯罪とされる行動すらも、元は人の心が問題です。みんな人の心の内から出てくることです。そもそも、人が神の前に立つときに、神が人の心を見られることは、旧約聖書でも知られていました(サムエル上16・7)。そして、イエスは山上の説教においても、

9月

18日

聖書講解

律法を心のレベルまで掘り下げ、心がよいことが神の国に入る鍵だと教えられました(マタイ5:21〜22、27〜28)。人の心の内にあるこの罪の解決こそが、神の目的であることを、イエスはすでに意識しておられたはずです。公生涯の始めから、イエスは自分の使命を自覚しておられました。十字架と復活を目指しておられました。だからこそ、ここで「聞いて悟るがよい」と強く呼びかけられたのです。

### 三、人を変えるもの

人の心の中にある悪を、人が取り除くことはできません。食物のように体の外に出て行くことはありませんし、自分で自分の心を変えることはできません。

人の心を造りかえる唯一のお方は、イエス・キリストです。イエスは人の心の中を見ることができるとお方です。誰も知り得ない、神だけが知り得る人の心の奥底をご覧になります。熱心に祈り、施しをし、敬虔に振舞うパリサイ人たちの心が、実は陰険で汚れに満ちていることを知っておられました。また、ナタナエルの心(ヨハネ1:47)も、サマリヤの女の悩み(ヨハネ4章)も、ザアカイ

の孤独(ルカ19:2〜10)も、ご存知でした。そして、イエスは人の心を取り扱われ、新しくし、神によって生れ変らせることがおできになるのです。イエスこそ真の救い主です。

「御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである」(1ヨハネ1:7)。十字架にかかられたイエス・キリストだけが、人の心の内側の問題を解決することができるのです。

### 結論

人の罪や汚れの問題は、外側から解決することはできません。また、人の努力や修養で心が造りかえられるわけではありません。でも、愛の神は、完全な解決の道を備えてくださいました。「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」(1ヨハネ1:9)とあるとおりです。

イエス・キリストの十字架を信じ、神の御前に自分の心の内の罪を認めて、悔い改める者には、罪のゆるしときよめが与えられるのです。

## 研究資料

(宮澤清志)

この箇所は、イエスとパリサイ人、律法学者たちとの論争の中でも大きなものの一つである「昔の人の言い伝え」についての論争の中の一コマである。内容的には1節から続いていくものではあるが、その聴衆を微妙に変えながらイエスの教えは続いていく。

さて、本日の聖書箇所はその中の「旧約聖書食物規定」に関するイエスの教えが述べられている。イエスは、これらの問答を通して、外面的・儀式的規定よりも、人間の内側、心の状態の方がはるかに重要であり、儀式的形式的に律法を守るよりも、心において何を考え、何に従うかが重要であることを指し示しているのである。並行箇所としてはマタイ15章10〜20節があるが、いくつかの点においてこのマルコの記事とは相違がある。その相違も含めてマタイの並行記事にも事前に目を留めておきたい。

## テキスト

**14 再び** 6節から13節まではイエスのユダヤ教当局者に対する教えの言葉であり、本節からは群衆への教えの言葉である。ここからイエスの言葉の聴き手は群衆となる。  
**聞いて悟るがよい** 文法的に、今のこの瞬間の出来事とし

て求める言葉である。集中して聞くようにというイエスの思いを込めた言葉であろう。

**15 汚す** (汚イノオー) 基本的意味は「共有する」という言葉である。しかし、そこから派生して「日常の、世俗の、汚れた」という意味も併せ持つ。この箇所では、悪しきものは神が創造された自然の世界の中にあるのではなく、人間自身の内側にあるのであるということを指し示す。

**16** この節はいくつかの写本(古代の手書きの聖書)には欠けていることから、括弧に入れられている。

**17** この節からは、再び場面が転換する。前節までは群衆に対する教えであり、主はわざわざ群衆を呼び寄せて語られた(14)。しかし、イエスが語られた言葉を弟子たちが理解できなかったのか、弟子たちのほうからイエスに質問する。  
**18 19** 「人の心の中にはいる」(19)「内部(心)から」

(23)とあるように、神との関係においては外的・物的なものではなく、心が決定的に重要であることを再び語る。**イエスはこのように、どんな食物でもきよいものとされた** マルコによるこの箇所の解説である。旧約聖書には「食物に関する規定」(レビ記11章)があり、ユダヤ人たちにとっては清い食物と汚れた食物とが明確に区別さ

9月

## 18日 研究資料

れていた。しかし、イエスは、このような区別は形式的な意味しかなく、食物自体が汚れているとは考えなかった。それゆえこの箇所は、イエスによる旧約聖書の新しい理解が明らかにされている非常に重要な箇所なのである。

**21〜23** ここから次の節までは、いわゆる「悪のリスト」とよばれるものである。この「悪のリスト」については、ほかにローマ1章29〜31節、ガラテヤ5章19〜21節、1テモテ1章9〜10節、Ⅱテモテ3章2〜5節等に見ることができ。この箇所の特徴として、全12個のリストのうち、前半の6個は複数形で書かれていることから、繰り返される行為、行為における悪について取り扱われており、後半の6個については単数形で書かれていることから悪徳のリストであろうと言われている。

なお、このリストに先だつて「悪い思い」を入れている。この「悪い思い」とは、これらの悪徳表に登場する諸悪の根源という意味である。

**不品行** 22節の「姦淫」よりも幅の広い言葉で、あらゆる種類の不法な性的行為を指す。**姦淫** 結婚した夫婦が相手を裏切つて不貞を働くこと。

**貪欲** 神の中にはなく、物事の中に幸福を見出す人の心にある、所有の欲望であり、「単に金銭ばかりでなく、

あらゆることにおいて、いつも自分のために隣人を犠牲にすることを意に介さない性質」と定義する学者もいる。

**邪惡** 人や物で積極的に悪を行うこと。**欺き** 人と人との関係を損ない、かつ教会員としての生活に対立する行為様式の一つ。

**好色** 性的不摂生をも包含するところの、人間に内在する「より多くを求める性向」に基づく行為であり、「すべてのしつけを恨む心の傾向」である。

**妬み** 元来、ギリシャ語のものの言葉では「悪い目」という意味の言葉である。この語は「魔法をかけるような目つきで悪意をもつて人を見ること」というような意味を持つ。

**誹り** 新共同訳では「悪口」となっている。これが神に対する人の行為として用いられる場合は「冒瀆」となり、人間同士の場合には「そしり」「悪口」となる。

**高慢** ギリシャ語の本来の意味は「自分自身を超えて示す」「みずからを上に表示する」となる。特に、表に出てこないような、心の奥底での態度を指すときに用いられる言葉である。

**愚痴** 新改訳聖書では「愚かさ」とあり、頭脳の「愚かさ」ではなく、道徳的にばかげた行為、愚行を行う者を意味するのである。

**参考図書** W・パークレー「新約聖書ギリシャ語精解」（日本基督教団出版局）他



## 聖書

マルコ7・14〜23

## タイトル

心を透かして見よう！

## 暗唱聖句

これらの悪はすべて内部から出てきて、

人をけがすのである。 マルコ7・23

## 目標

人を汚す内面からの罪に気づき、十字架による赦しときよめを受ける。

## 導入

(松浦みち子)

「おかあさん、なあと、おかあさんっていいにおい、洗たくしていたにおいでしょ、シャボンのあわのにおいでしょ」という歌があります。おかあさんは毎日のように汚れた物を洗たくしているので、石けんのにおいがするのですね。また、いつもタバコを吸っている人からは、タバコのおいが染み付いてにおってきます。その人が何に時間を使うかによって、少しずつにおいがついてその人の隠れた部分が明るみに出てくるのですね。

東日本大震災後、繰り返し流されたCM覚えていますか？「こころ」はだれにも見えないけれど、「こころづかい」は見える。「思い」は見えないけれど、「思いやり」はだれにでも見える(宮澤章二)。「心」「思い」は目にみえませ

んが、形になって現れ、見えたり、におったりするのです。

## イエス様の教え

イエス様の時代にとても宗教に熱心な人々がいました。パリサイ人やユダヤ人、律法学者たちです。これらの人々は、昔の人からの言い伝えをかたく守っていました。手の洗いや食器の洗い方、また、これは清い食べ物、これは汚れた食べ物といって、食材にもこだわっていたのです。そこで、イエス様はこう言われました。「すべて外から人の中にはいつて、人を汚すことのできる物は何もありません。人の中から出てくるものが人を汚すのです」。弟子たちは、「えつ、どういふことですか？」とイエス様に尋ねました。すると「外から人の中にはいつて来るものは、人を汚すことができないということがあなたがたにはわからないのですか。それは人の心の中に入らないで、腹の中にはいり、外に出ていくだけなのです」と答えられました。つまり、食べた物は、腹の中で消化され、栄養が吸収され、食べ物のカスがウンチとなって外に出ていくだけなので、人を汚すことはありません。このようにイエス様は、すべての食物をきよいものとされました。

## 人を汚すものは？

イエス様は、「人の中から出てくるものが人を汚すのです」と言われました。いったい何が汚すのでしょうか。人の中から出てくるものは、悪い思いです。心の中や、悪い思いはレントゲン撮影をしても見えません。しかし、行為となつてあらわれ、見えてきます。人の心の中から出てくるものは、不品行、盗み、殺人、姦淫、貪欲、欺き、妬み、誹り、高慢、愚痴などです。これらが人の心の中から出てきて人を汚すのです。イエス様は外側ばかり美しくしようとこだわる人々に向かって「あなたがたは、ちょうど白くきれいに塗った墓のようだ」と厳しく言われます。皆さんも自分の胸に手をあてて考えてみましょう。「あのゲーム機、欲しいなあ」という思いがやがて盗みに繋がります。また、自分よりすぐれた人を見て、ねたみ心がわいてきて「あんなやつ、いなければいいの」という思いが、やがて恐ろしい殺人に繋がるのです。アダムとエバの家庭の兄弟は、兄のカインが弟のアベルをねたんだことよつて、やがて兄が弟を殺すという恐ろしい結果を招きました。また、双子の兄弟もそうです。弟ヤコブの貪欲な心が兄エソウを欺き、父をだまして祝福

を奪い取つてしまいます。

## きよめられた心になるには？

どうしたら私たちの心は清くなるのでしょうか？ 一生懸命自分の努力で、善いことに励んだら、きれいな心になるのでしょうか？ いいえ、律法の行いによつては、だれひとり、神様の前に義なる者とは認められません。ただひとつの方法があります。イエス様の十字架の血潮を信じる信仰によつてのみ、清くされるのです。イエス様は、私たちの罪のために、贖いの供え物として十字架についでくださり、救いときよめの道を開いてくださったのです。ですから、「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる」(イヨハネ1:9)のです。

私たちは人を汚す心の罪に気づきましょう。そのためにはこう祈りましょう。「天のお父様、どうぞ、私の心の目を開いて下さい。そうして、みことばを通して、心の罪に気づき、イエス様の十字架を仰ぎ信じるものとしてください」と。

61



## 聖書 マタイ15・21〜28

## テーマ 見あげた信仰

## 序論

(山田和幸)

イエス様がその公生涯で唯一外国にまで足をのびされた時、不信仰な弟子たちとは対照的に、立派な信仰の異邦人の女性との出会いがありました。

## 一、切なる求め

ユダヤ人は異邦人との接触によつて宗教的に汚れることを恐れていました。ユダヤからガリラヤに行くのに、近道であるサマリヤを避けてわざわざ山地を行くのと同じで、フェニキヤ人の地に足を踏み入れることはありませんでした。

ユダヤ人との交わりがほとんどなく、ギリシャ文化の影響を強く受けているフェニキヤの「カナンの女」が、イエスを「主よ、ダビデの子よ」と呼び、あわれみを請うたのは驚きです（参照8・25、9・27）。この言葉は、ダビデ王国の救い主の意味を知り、異邦人もその恵みに与れることを知っている人の表現だからです。

娘が悪霊に取りつかれているという悩みを抱えていたこの女は、一縷の望み（いちる）をかけてイエス様について調べ、救い主としてのイエスに期待して訪ねてきたのでしよう。イエスが密かに行かれたにもかかわらず、彼女は見つけだして訪ねてきました。イエスに「主よ、ダビデの子よ」と呼びかけました。イスラエルの真の王、救い主としてのイエスをすでに知っていたのです。

人は苦しみの中でこそ、まことの神様を求めるものです。この女性もそれ故にイエスに出会うことができたのです。

## 二、信仰の成長

イエスの態度は、一見つれなく見えます。まずはじめは、無視されました。実は、イエスはこれまで、求める者を拒否したことがあります。だから、弟子たちは違和感を感じながら、イエスにはつきり応答するように提案したのです。次にイエスは、まるで拒否しているように見える言葉を発します。しかし、イエスはこの女性の信仰が本物になることを期待しておられたのです。さらに、「子供たちのパンを取つて小犬に投げてやるのは、よろしくない」という言葉に、軽蔑（けいべつ）の語感はありません。

この女性の信仰を引き出すために、ユーモアを持つて柔らかに拒否されただけです。冷たく突き放す言葉ではないのです。新約聖書で、「犬ども」とは異邦人の蔑称ですが、「小犬」とはペットのことです。「ペットより家族が先ですよ」というニュアンスです。だからこそ、彼女はイエスの言葉を受け入れつつ、食いが下がることができたのです。そして、その信仰告白はイエス様に認められたのです。「その言葉で、じゅうぶんである」（マルコ7・29）と。

イエスは、すぐに求めに応じないことでこの女性の信仰を引き出し、その上で願いに応えられました。私たちなら、どう応答するでしょうか。この女性のように、謙遜な信仰で食いが下がることが出来るでしょうか。

### 三、立派な信仰

〈女よ、あなたの信仰は見あげたものである〉と、イエスにほめられた信仰とは何だったのでしょうか。「信仰が大きい」（28節直訳）というイエスの言葉は、信仰が小さい弟子たち（8・26、14・31、16・8）と対照的です。何度もとがめられている弟子たちとは違って、絶賛の響

きがあります。実は、イエスに信仰をほめられた人は多くありません。この女性と、百卒長に対しての二回だけです（マタイ8・5・13）。

この女性は、①どこまでも謙虚な姿勢で神の恵みを求め、②イエスの言葉を素直に受け入れ、③イエスのたえに信仰による理解力をあらわしました。そのような信仰が、「見あげたもの」とイエスに認められた信仰なのです。

### 結論

私たちも、熱心に主の恵みを求めながらも、〈主よ、お言葉どおりです〉と、すべてを委ねた謙遜な信仰を目指しましょう。〈ダビデの子〉とイエス様の本来の姿を認め、〈小犬〉と自らをへりくだり、娘が癒されたのを見ないでも信じた信仰です。神様はそのような信仰者を、今も求めておられるのです。

そして、そのような信仰に進む者は、神様の御業を経験することができるのです。

「そこで、女が家に帰ってみると、その子は床の上に寝ており、悪霊は出てしまっていた」（マルコ7・30）。

## 研究資料

(宮澤清志)

この箇所は、先週取り上げた「きよめ論争」の後に起こった出来事である。主イエスとユダヤ教指導者は、先週の論争等を通していよいよ対立が鮮明になり、両者の対立は抜き差しならないものとなってきた。そこでイエスは弟子たちを連れて異邦人の地に退かれたのであった。しかし、イエスのうわさは既に異邦人の地にも広がっており、その地にもイエスを待っている人々がいた。

## テキスト

21 **そこ** この言葉には、マタイは2つの意味合いをおいていると考えられる。まずは地理的意味での「そこ」であって、具体的にはカペナウムであろうと考えられる。しかし、それ以上に、マタイはこの箇所にも別の意味合いも込めている。すなわち、前節までの流れから、ユダヤ教指導者や押し迫る群衆を避ける目的から異邦人の地へと足を運んだこと、またやがて福音が全世界へ広がっていくことの暗示としての意味をもたせている。

**ツロとシドンとの地方** ツロはイスラエルのガリラヤ国境から20キロメートル北方にある海港都市。シドンはツロのさらに北にある都市。これらの町々は、旧約聖書では罪深

い町々とされており（イザヤ書23章）、ユダヤ人にとってはメシヤがその町で祝福の言葉を告げるなどということは考えられないことであった。イエスもパレスチナの地方から出られるのは後にも先にもただこの時だけである。

22 **その地方** ツロとシドンとの地方 **カナン** マルコはこの言葉を「ツロ・フェニキヤ」と述べている。昔、イスラエルの民がエジプトから脱出してパレスチナの地方へとやってきたとき、そこにいた先住民族である。カナンとイスラエルとは仇敵関係にあった。したがって、カナンの女がイエスに助けを求めたことは通常ありえないことであった。それほどまでにこの女性は助けを必要としていたことの証拠であり、このことは、**叫びつづけた**（直訳すると「金切り声をあげて叫び続けた」となる）ことの中にもうかがえる。

**ダビデの子** この表現はユダヤ的表現であり、メシヤの称号として用いられていた。ここで異邦人であるカナンの女がイエスに対してこの称号を用いていたことは、少なくともこの女性はイエスをメシヤと信じていたことを表している。このことは驚くべきことであり、つまりきを乗り越えて熱心にイエスに救いを求めたことの証拠である。

23 **ひと言もお答えにならなかった** イエスのこのような

沈黙は、他の箇所にはない。しかし、この沈黙は、この女性が異邦人であるからというのではなく、この女性の信仰を試されるがゆえのイエスの意図が見て取れる。**この女を追いついてください** 弟子たちのこの言葉をどのように理解するかは諸説ある。この女性を断つて帰すようにともとれるが、この物語の状況から考えるとこの女性の願いをかなえて帰すようにとの弟子たちの願いであろう。

**24** イエスは前節の沈黙を突然破られ、この女性をさらに突き放す言葉を発せられる。**イスラエルの家の失われた羊** 「イスラエルの羊」とは、イスラエルの民という意味であり、イエスは10章6節において、弟子たちを宣教に派遣するに当たってこの表現を用い、契約の民であるイスラエルの民以外のところには行かないようにと命じられた。

**25** 前節のイエスの冷たい言葉に対しても、この女はあきらめなかった。

**26** この節も、私たちに戸惑いを与える箇所の一つである。というのは、イエスがカナンの女を「小犬」扱いしたからである。当時、ユダヤ人は異邦人を「犬」と呼んでいた（イザヤ書56・10）が、それは異邦人に対する差別的な表現であり、イエスまでもが異邦人を差別的扱いするのか、ということである。しかし、イエスが最後にこの力

ナンの女に対してとつた態度から、「小犬」という言葉は差別的表現としてではなく、ユーモアのセンスに基づいた表現であったと言える。**子供たち** ユダヤ人のこと。

**小犬** 異邦人のこと。**パン** イエスが与える祝福のこと。

**27** 前節のイエスの拒絶の言葉にもかかわらず、なおもこの女はあきらめることも怒ることもなかった。むしろ、**主よ、お言葉どおりです** と、まずイエスの言葉を受け入れた。同時にこの女はさらに食いがかる。この言葉の中には、自らを **小犬** であると認める謙遜さ、また何としてもそのおこぼれにあずかりたいという必死さが表れている。

**28** この女は、イエスの再三のテストに見事にその信仰をもつて答えた。**あなたの信仰** 原文では「あなたの」に強調点がおかれている。すなわち、ユダヤ人ではない、異邦人のあなたの信仰、と訳せる言葉である。ちなみにマタイにおいて、その信仰がほめられている人物は、この女性と百卒長（8・10）であり、いずれも異邦人である。

**見上げたものである（ヘメガレー）** 非常に大きい、あるいは「すごい」という意味。

**参考図書** 中澤啓介『マタイの福音書註解』（いのちのことば社）他

## 聖書

マタイ15・21〜28

## タイトル

イエス様に信仰をほめられた人

## 暗唱聖句

女よ、あなたの信仰は見あげたものである。あなたの願いどおりになるように。  
マタイ15・28

## 目標

謙遜でありつつ大胆な信仰によって祈る者となる。

## 導入

(松浦みち子)

皆さんはお祈りする時、ひとつのことを何度か、答えられるまで祈りますか？一度や二度お祈りして答えられなかった時、「なあんだ、神様、ちつともきいてくれないや。もう、お祈りするのやめよつと！」と、お祈りをやめてしまうことはありませんか？お祈りの答えには三つがあることを心に覚えましょう。信号を思い浮かべてもらなさい。青・黄・赤と三つの色がありますね。青は「すすめ」黄は「待て」赤は「止まれ」ですね。お祈りも青「いいですよ」とすぐに答えられるもの、黄「ちよつと待ちなさい」と忍耐して祈り続けるもの、赤「だめです」と願っていることが間違っていて答えられないもの、があります。

毎日の生活の中でこのことを心にとめて祈りましょう。

## イエス様に助けを求める女

イエス様がツロとシドンの地方に行かれた時のことです。一人のカナン人の女の人が、イエス様のところに叫びながら近づいてきました。「主よ、ダビデの子よ、わたしをあわれんでください。娘が悪霊にとりつかれ、苦しんでいます」。この人は、娘のために今までいろいろなことをしてみただけです。けれども、どんな医者も薬も娘を治すことができなかったのです。そのような時、イエス様のうわさを聞き、イエス様なら娘を治してくださいとお願いするところ、イエス様は一言もお答えになりません。女の人、ますます声を大にして「イエス様、わたしをあわれんでください」と、しつこいばかりに叫び続けます。イエス様の弟子たちも困ってしまいました。「イエス様、何とかして、このうるさい女を追い払ってください。叫びながらついてきていますから」。でも、イエス様は黙って歩いていらつしやいます。いつもやさしいイエス様なのに、どうなさったのでしょうか。

## あきらめない信仰の女

9月

## 25日 礼拝メッセージ例

ついにイエス様が口を開かれました。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外の者には、つかわされていない」。なんだかイエス様らしくない冷たい感じの言葉です。その意味はこうです。イエス様は、イスラエル人の救いのためにこの世に遣わされて来られたのです。その使命のため、全生涯をかけて働いておられました。「空の鳥には巢がある。狐には穴がある。しかし、わたしには枕する所がない」、と言われるほど多忙な伝道の日々でした。このイスラエル人以外の人にかかわっている場合ではないということです。しかし、この女の人はイエス様につつまねられたにもかかわらず一歩も引き下がりません。さらにイエス様に近づき、ひれ伏して、いつそう熱心に「主よ、わたしをお助けください」と叫びました。今度は、態度を変えることなく「子どもたちのパンを取りあげて、小犬に投げてやることはできない」と言われるではありませんか。これは子どもであるイスラエル人をさしおき、それ以外の人（小犬）を救うことはできないということです。ひるまず、女の人は「主よ、お言葉おどります。でも、小犬もその主人の食卓から落ちるパンくずはいただきます」と言いました。

## 信仰をほめられた女

すると、イエス様は態度を一変され、「あなたの信仰は見上げたものである。あなたの願いどおりになるように」と言われ、その時、娘は癒されたのです。なぜ、この女の人の信仰をほめられたのでしょうか。一つは、娘を愛する愛に基づく信仰です。女の人は「わたしをあわれんでください。わたしをお助けください」と必死で叫んでいます。悪霊にとりつかれ苦しんでいる娘の痛みを自分自身の痛みとして受け止め、大胆になりふりかまわず、小犬とさげすまれてもイエス様に近づきました。なんと深い愛でしょう。この人の信仰は、愛に基づく、神様がもつとも喜ばれる信仰でした。二つは、イエス様がどんな態度をとられても「主よ」と叫び、この方こそ神の子だと信じ、必ず治して下さるという、あきらめない希望に基づく信仰でした。わたしたちも、この女の人のように、熱心に大胆な信仰をもって祈りましょう。たとえ、どんなにつらい中におかれても、必ず主は助け、道を開いてくださると信じましょう。

♪主に従い行くは♪（教会学校聖歌 82）





# 牧羊ひろば



## 大久保めぐみ教会 教会学校

「幼な子らをわたしの所に來るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのよな者の国である」マルコ10:14

### ●教会設立と

#### 教会学校の働きの開始

私たちの教会は、兵庫県の西部にあり、人口が七万六千人余りの町です。JR大久保駅の周辺が開発されて、人口

が増加傾向にあり、古い住宅の立て替えもだんだん進んできています。私たちは今年創立七十八周年を迎えた明石人丸教会の永年の祈りと伝道に

よって誕生した教会です。これまで数箇所の家庭集会や教会学校分校が行われて、種まきが続けられてきました。

一九九九年から、伝道所開設を目指して、日曜の午後の礼拝が地域の集会所を借りて始まりしました。六年前の

二〇〇五年七月に現在の会堂が建設され、明石人丸教会から四十名ほどの信徒たちが分かれて群れをつくり、「明石人丸教会大久保会堂」となりました。そして昨年二〇一〇年四月に「大久保めぐみ教会」として設立式を行い、第一種教会としてスタートしています。

会堂が建設されるまでは、大久保地域には二つの教会学校分校がありましたが、献堂を契機に大久保会堂に統合されました。ですから、教会学校にどれだけの人が集まるのかも未知数でしたが、とにかくCSに関心を持つ人たちが五人が教師となり、教会全体の助けを受けながら進み出しました。

### ●子ども大会―地域に根付くために

#### ①案内試行錯誤

献堂式の前に二万枚のチラシを用意して教会案内を配りました。チラシの中に特別集会として「子ども大会」の案内をしていましたので、最初の子ども大会には明石人丸教会の助けもあつて、大人と子ども合わせて百名、地域の子どもたちが二十〜三十名ほど集いました。

その後も毎月第三週の土曜日午後二時に、原則として



第一回子ども大会

子ども大会を開いています。大人が多い日もありますが、平均して十五名ぐらいの出席です。二回目からは小学校にチラシを配りに行っていました。が、次第に受け取る子どもが減り、捨てられてしまうことが多くなってきたため、半年ほどで止めました。その後のチラシ配りはクリスマスなどのときだけに變更しています。

けれどもそのクリスマス案内も目に見える効果がなく、集団下校する彼らに渡すのも難しい状況に変わってきました。そこで、教師たちがアイディアを出し合い、それまで配っていたA6サイズのチラシから少し固めの紙でチケットサイズにかえて、小学校の校門から少し離れて配ることにしました。低学年の子どもたちは喜んで受け取ってくれましたが、これも人集めには効果が少なかったように感じました。

たまたま配布の日に大雨に降られてチラシが残ってし

まったため、担当していたCS教師が翌日公園で遊んでいるおじいちゃんとお孫さんに手渡したことがきっかけとなつて、このご家族が昨年から子ども大会に続けて来てくれるようになっていきます。これは思いがけない神様からのプレゼントでした。

子どもたちが集まるチャンスは、案外企画外のところにあるようです。時間に余裕のある壮年のための集いとして始められていた「囲碁将棋交流会」（月末の土曜日午後一時から）に、近所の将棋大好き少年が来るようになり、子ども大会のクリスマスなどにつながることもありました。

最近では教会の近くに住むピアノを教えている姉妹が、ピアノの生徒たちにチラシを配ってくださったことがきっかけで、十五人ぐらいの新しい子どもたちがクリスマスから続いて集っています。

チラシ配布の必要と共に感じることは、子どもが友だちを誘ってくるのが、本当に効



子ども大会クリスマス

果的だということでした。

この子ども大会の案内のために毎月がきを用意して手渡しと郵送をします。お正月は年賀状を用いて兄弟がいても一人ひとり別々に送ります。子ども大会の在籍は現在六十名を超えました。参加者はその月によってばらつきがありますが、子どもも大人もそれぞれ五人〜十五人ほどの入れ替わりです。子どもたちには保護者の方がついて来られるので、交わりの機会が与えられて感謝です。

子ども大会 餅つき



子ども大会 ミニ運動会



## ② プログラム内容

プログラムは、さんび、お祈り、み言葉暗唱、聖書の紙芝居や聖書の絵本のあとで短いお話、その後はお楽しみ会です。クリスマス、餅つき、ゲーム、ミニ運動会、たこ焼き、イチゴツミ、芋ほり、スイカ割り、リース作り、カード作りなど、知恵をしぼっています。



子ども大会 芋ほり



子ども大会 スイカ割り

昨年の八月は、カレーライスの昼食を済ませてから、教会の中庭で大型のゴムプールを二つ用意して水遊びをしました。準備は壮年の方々に助けてもらいました。この月の水道代はいつもより上がってしまいました。が、今年はずっとプログラムを充実させる予定です。

私たちの教会の敷地には牧師館用地が三十坪弱あるので、そこを開墾して毎年サツマイモを植えます。土地の準備はこれまで畑係(農事に関心のある方々)のみなさんが協力してくださいます。

## ③ 今後の願い

このように私たちの教会学校の現状は「開拓」であり、子ども伝道のメインは「子ども大会」です。何とか地域の子どもたちが教会の存在を知り、教会が特別なところではなく、だれでも入っていい身近な存在となるようにと願っています。そして中長期

的には、その中から礼拝につながり救われる人たちが起こされることを祈っています。

### ●日曜日の礼拝と分級

現在はCS教師が四名（男性一名、女性三名）です。私たちの教会は、いつも子どもと大人と一緒に日曜の朝十時から十一時まで礼拝をしています。集っている子どもたちは、家族の連れがクリスチャンであるか求道者である大人と一緒に集まっています。礼拝の中で子どもたちは大人に混じって、毎週一人ずつ順番に献金当番の奉仕をします。



幼稚科分級の様子

六年前は、下はゼロ歳児から上は十歳まで本当に幼い子どもたちだけでした。そして礼拝は大人のお話だけだったのですが、途中から二ヶ月に一度ぐらいの割合で、切り絵などの視覚教材を使って牧師が十分程度、その日のメッセージを分かりやすくまとめてお話をするようにしました。



高学年分級の様子

幼稚園は賛美を歌って、その日のみ言葉カード（教会独自のものを作成）をカード帳にはり、先生と子どもたちがお話をし、お祈りで終わります。小学科の分級は牧羊者のワークBをします。最近やるとワークCを学ぶ子どもたちも起こされています。



小学科分級の様子

礼拝後は分級となります。五く六人が幼稚園で、小学生が一人だけの状態から始まっていたので、しばらくは皆一緒にの単級をしていましたが、徐々に小学科を分けてもつようになりました。

現在は説教の前に一く二枚の紙芝居などを用いて、できるだけ毎週子どもにも分かる部分を組み入れるように努めています。礼拝メッセージは、牧羊者のカリキュラムに従っています。

部屋数と担当者の不足から、現在は小学校高学年と中学生の男子は男性の先生が一人で分級を指導しています。この男性のグループの生徒は子どもだけではありません。五年前に洗礼を受け、耳が遠くて礼拝メッセージが聞こえにくい八十歳の壮年の方が一人、生徒として子どもたちと並んで聖書を学んでいます。

### ●現状と展望

私たちにとっての一つの課題は部屋の問題です。分級をするには部屋数が少ないため工夫が必要です。現在は、男性のクラスが礼拝堂、小学科が事務室、幼稚科は母子室に分かれています。礼拝堂は礼拝直後ですぐに分級に入れないのが難点です。今後牧師館を建てる時には、教育館の構想も必要だと思っています。

もう一つの課題はCS教師の養成です。毎月のCS教師会も十分ではありません。子ども大会の企画と日曜の分級や子どもたちの状況を話し合う程度になっています。学びと祈りの充実も必要です。また現在の担当者が皆六十歳代であるので、これからの若いCS教師を育てていくことも祈りの課題です。

教会で一時間あまり過ごす子どもたちのあとの時間は、すべて家庭と学校での時間です。教会学校で、教師と触れている時間は本当にわずかです。しかも、一回休むと二週間のブランクとなります。このことを考えるとCS教師に託されている分級の十五分の時間は大変貴重なものです。礼拝と分級を終えてからの一週間、彼らが家庭や社会で守られ、霊的に養われていくために、背後で祈ることがどんなに必要であるかを思わないではいられません。そして、彼らを養っている保護者の方々の信仰が成長していくことも、大変重要なポイントであると感じています。

先日、小一時間ほどかけて礼拝に集ってこられていた三十代の壮年の方（客員）がこうおっしゃいました。「子どもたちを教会学校に連れて行きたいので、やはり近くの教会に通うことにします」と。この方にはまだ洗礼を受けていらつしやらない奥様と、四歳と一歳の女の子さんがいらつしやいます。ご家族を残して彼だけが礼拝にいられていたのでした。

私たちにとって忠実な礼拝者を失うことは大変残念なことです。けれども、このお父さんを持った子どもさんは幸せだと思いました。神様の愛に触れ、聖書に教えられて

育つことの大切さを知って実行に移そうとされているからです。この男性はしっかりしたクリスチャンホームに育たれ、家族の救いが必要であることを知っておられたのです。子どもへの伝道、その保護者への伝道は連動しています。試行錯誤中の私たちの教会学校ですが、神様の愛を知る喜びと恵みに励まされて、主に委ねられた務めを果たさせていたきたいと思います。

現在の生徒は、フルメンバーで中学生一名、小学生五名、幼稚科五名の小さな日曜日の教会学校です。子ども大会だけの子どもたちも多いので、保護者の方々との関係作りも含め、幻を抱いて前進したいと願っています。

(光田隆代)

## 「おわりに」

『牧羊者』二〇一一年度第Ⅱ巻をお届けできますことを感謝します。3月11日に発生した東日本大震災によって、色々な面で大変な中、執筆者の方々には貴重な時間を割いて執筆していただき、心から感謝いたします。今回の教師養成講座は、金井信生師の「子どもに届く説教」を掲載しました。また、「牧羊ひろば」では、教会として新しくスタートした大久保めぐみ教会の教会学校の歩みを、光田師に紹介していただきました。

終わりに今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

### 聖書講解

福井文彦師 高橋頼男師 金井信生師  
山田和幸師  
宮澤清志師 中島啓一師 小平德行師  
飯田勝彦師 和田治師 水野晶子師  
松浦みち子師

### 研究資料 メッセージ例

### ワーク(A)

吉田美穂師 鎌野 幸師  
野勢かほる師 竹崎光則師  
(C) 長尾明美師 小菅央子師  
(D) 上森恭子師 田中裕明師

### 中高科へのヒント

子ども聖書日課

### フラッシュカード イラスト

小野淳子師 土屋直子師 藤井洋美師  
丹羽 遥姉  
丹羽 遥姉

### ワープロ打ち込み

楠淳子師 長尾明美師  
正 長田栄一師 加藤清師 山田和幸師  
長尾秀紀師 長尾明美師

また、陰で労してくださった各師と兄弟姉妹、ワーク印刷

と発送の教団事務  
所職員の方、印刷  
刷のあくもと菱三  
印刷に心から感謝  
いたします。

### 牧羊者

聖書教育教案誌

二〇一一年度Ⅱ巻

二〇一一年七月一日発行

発行所

日本イエス・キリスト教団

企画監修

神戸市兵庫区塚本通三―三―一九

印刷所

菱三印刷株式会社

電話

〇七〇五七五―五五一一

FAX

〇七〇五七五―五五一一

電話

〇七〇五七五―五七六一

\*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み